

# イナズマイレブンG03 ソウルビースト

喋る盾

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

未来での激闘を終えた松風天馬と雷門サッカー部。

サッカーの未来を救った彼らのもとに舞い込んだのは、何と10年振りに決まった世界大会、フットボールフロンティア インターナショナル V<sup>ビジョン</sup>2 通称【FIV2】の開催の知らせであった。

遂に決まった世界挑戦。

しかし、代表候補選手の中には知らない人もいて……？

波乱ありきの松風天馬の新たな挑戦が、今始まる――。



【注意】

・イナズマイレブンGOに再熟した作者が、うる覚えの状態で勢いで書いた自己満足のような代物です。見るに耐えない方はブラウザバック推奨です。

・GO ギャラクシーとは別軸のGO2続編なので、一部を除いてアースイレブンだった別スポーツの選手達のサッカー干渉はありません。

・タイトルにもあるようにソウルはありますが、ギャラクシーのモノとは少し別のモノとなっています。

・描写が下手なのはご勘弁を。

# 目次

## 【序章】

黒き二つの影と開催宣言 | 1

激闘のラグナロクから一ヶ月 | 5

## 【第1章】世界トッププレイヤーへの挑戦

第一話 新たな挑戦 | 15

第二話 それぞれの挨拶 | 27

第三話 剣を継ぎし者 | 40

第四話 一年生の底力 | 61

第五話 未知の力、そして決着

81

第六話 それぞれの思惑 | 103

## 【第2章】誕生！新生イナズマジャパン！！

第七話 出会いと始まり | 119

第八話 選考試合前日〜Aチーム編〜 | 140

第九話 選考試合前日〜Bチーム編〜 | 167

第十話 日本代表選考試合 その1 | 188

## 【序章】

# 黒き二つの影と開催宣言

「あれから10年……長く感じたものだな」

とある国、とあるビルの一室で、椅子に腰を掛けた男が不意にそう呟く。

10年前。

フットボールフロンティアインターナショナル、通称FFIという少年サッカーの世界を決める大会が行われた事で、サッカーは世界的に大きな変化をもたらした。

なかでも、FFI優勝国である"日本"におけるサッカーの人気は、社会を大きく揺るがすほどの影響力があったほどだ。

少年サッカーの世界一を決める大会。

しかしその大会の裏では、ある男の野望が着々と進んでおり、一部の優秀なサッカープレイヤーとその関係者がいなければ、全世界は危機に落ちていたであろう。

その男の非人道的な行いは、大会出場選手、そして多くの人々に危害を与える結果と

なり、その後10年、少年サッカー最高の祭典であるフットボールフロンティアインターナショナルは開催される事はなかった。

「ガルシルド・ベイハン……貴方の敗因はサッカーを甘く見ていたからだ。サッカー……いや、サッカープレイヤーをもっと理解していれば、今頃、世界は貴方の手中にあった」

そう口にし男は立ち上がり、高層のビルから見える景色に視線を移す。

「……私は奴とは違う。サッカーを愛し、サッカープレイヤーが如何に素晴らしい存在かを理解しているからこそ……その力を利用する事が出来る」

暗い室内に差し込む月明かり。夜景を一望する男の後ろでは、あるデータがデスク上のパソコンに映し出されていた。

更にその奥では、古傷が残った顔にサングラスを掛け、白いスーツを着込んだ男がソファーに腰を掛けている。その男は不敵に笑い、サングラスの奥に潜む黒い眼光を窓際に立つ男に向けていた。

暗闇を照らす月明かりと共に輝く夜景を目の前に、男は両手を広げ高らかに声を上げる。

「……時は来た。私は、サッカーという概念を全世界に知らしめるツツ!! サッカーは人の運命さえも左右するのだと、この世界にわからせてやるのだツツ!!!」

全ての準備は整った。

後は実行に移すのみ。

そう言わんばかりに、男は高揚した気持ちを言葉に込め、口にする。

「さあッ！ 始めようじゃないか!! 全世界のサッカープレイヤーの夢であり、憧れの祭典!! この溢れかえった優秀なサッカープレイヤー達の頂点を決める世界大会……」

「……フットボールフロンティアインターナショナル ビジョン V 2 スタートの始まりだ」

◇イナズマイレブンGO3 ソウルビースト◇

【序章】黒き二つの影と開催宣言



## 激闘のラグナロクから一ヶ月

あの未来人との激闘の日々から早一ヶ月。

時空最強イレブンを集める旅をした仲間たちはそれぞれの時代へと帰り、それぞれの日常に戻っていきました。

また、その主軸となった雷門イレブンを現代へと帰り、松風天馬キャプテンのもとで、日々サッカーに明け暮れています。

ーSide・松風天馬

ーサッカー棟内スタジアム

「神童センパイ……っちです！」

俺は霧野センパイと狩屋のデイフェンスで攻めあぐねていた神童センパイに、サイドから飛び出し声を掛ける。

俺の名前は松風天馬。

雷門中一年でポジションはMF。

色々と訳あつて、前回のホーリーロード……中学サッカー日本一を決める大会の決勝戦前から、この雷門中サッカー部のキャプテンに、一年生ながら務めている。

俺なんか、前キャプテンの神童センパイのようにキャプテンとしてチームを引っ張る事はまだ難しいけど、チームの皆の協力あつて何とかやれていると思う。

今は4対5の攻守に分かれたミニゲーム形式で実践練習をしていて、俺や神童センパイは攻め側でおこなっている。

「頼んだぞー！天馬ー！」

そう口にした神童センパイから、俺へとパスが通る。

神童センパイはこの雷門の司令塔であり、MFとして広い視野と正確なパスが強みだ。二人のDFに阻まれていても、ベストタイミングで俺の足元にパスが通る。

俺はそのまま得意のドリブルで攻め込み、一気にゴール前まで持ち込む……その手前で。

「行かせないぞ、天馬！」

三年生の車田センパイが前に立ち塞がる。

俺よりも2年早くから、この雷門サッカー部でDFとしてやってきた先輩。そのディフェンス力も高く、集中しなければ一気にボールを奪われてしまう。

車田センパイが前に出るが、俺はそのまま止まらず、更に加速していく。車田センパイと接触する手前で、俺は必殺技を繰り出した。

『そよ風ステップ…S！』

俺は風を纏って車田センパイの手前で体を捻り、最大まで進化したそよ風ステップで抜き去る。

抜き去ってすぐ、同じく三年生の天城センパイがカバーに入った事で進路を閉ざされてしまうが、サイドから上がる人影が視界に入り、咄嗟にそちらへパスを出す。

「剣城！頼んだ！」

あいつはこの雷門で一番のキック力を持ち、エースストライカー筆頭の一年生FW、剣城京介。

元々敵としてこの雷門に来ただけで、最後はチームとも和解して、今では一番頼れるストライカーとして皆信頼している。

「ああ、任せろ！」

俺から剣城へのパスは上手く通り、ゴール前フリーの状態でキーパーと1対1になる。

キーパーが構える中、剣城は不敵に笑い黒いオーラを纏わせる。

そのオーラは黒き翼となり羽ばたく事で、剣城はボールと共に空中へと移動する。そのまま翼と化したオーラをボールに纏わせつつ、体を捻り、必殺技シュートを撃ち出した。

『デビルバースト！でええりやああ！』

強大な黒いオーラを纏ったボールはゴールへと向かう。

相手のGK……現雷門の正GKである三国センパイは、拳を合わせてオーラを集中させ、両手を一気に広げる。

纏ったオーラは巨大な手として形成され、剣城の必殺技シユートに向かって一気に突き出した。

『うおおおおお！真！無頼ハンドオオ！』

強大な必殺技同士が激突する。

真まで高めた無頼ハンドで堪える三国センパイだが、剣城のシユートの威力に徐々に押されていく。

「ぐ……ッ、う、うわああああ!!」

バリエインツ、という音と共に、三国センパイの無頼ハンドが粉碎する。

守る盾を失ったゴールに剣城のシユートが突き刺さり、得点が入った。つまりこのミニゲームは、攻め側の俺たちの勝利だ。

俺は得点を決めた剣城のもとに駆け寄り、手を上げる。

「やったな、劍城！ やつぱり凄いよ！ お前のシュート！」

「……フツ、当然だ」

パンツ！ と俺と劍城の手が重なり、ハイタッチをする。

最初の頃は確かに敵同士で、互いに衝突していた時もあったけど、ホーリーロードや未来での戦いを経て、コイツとは信頼し合える仲間になった。そんな気がする。

そんな俺たちの所に神童センパイ、そして今回はベンチで控えてた信助も近づいてくる。

「あそこでパスは良い判断だったぞ、天馬」

「うんうん！ それに、劍城のシュートも前よりパワーアップしてたよね！ 僕も負けてられないなあ」

と、キーパーの構えを取りながら、意気込むように口にする信助。

信助は俺が雷門に来て初めて出来た親友で、それこそ最初の試合からずっと一緒にサッカーしてきた大切な仲間だ。

信助は最初、DFとしてプレイしてただけで、そのジャンプ力、瞬発性から三国センプアイにGKを勧められて、次期雷門の正GKとして特訓してるんだ。

先の未来での戦いでも、時空最強イレブンのGKとして、ゴールを守っていたりもする。

「そうだな。皆未来での経験を活かして日々進化している。これなら、来年のホーリーロードも安心して任せられるな」

「確かに。特に時空最強イレブンだった天馬くんや剣城くん達は一皮剥けたって感じですよねー。……まあ、あの強力な時空最強イレブンの力を手放しちやったのは惜しかったなーとは未だに思いますけどねー」

俺たちの所に三国センプアイや狩屋も来て、そう口にする。狩屋は頭の後ろに手を置き、嘆息しつつ、といった感じだ。

狩屋の言う"時空最強イレブンの力"と言うのは、未来からやってきたフェイやワンダバと共に、過去の各時代、未知の世界から時空最強に当てるまる人物、動物、存在のオーラを融合させる「ミキシマックス」という未来の技術によって得た力の事だ。

未来での最強チームとの戦いに無くてはならない力で、あの力がなかったら、未来の

世界も救えなかったし、俺たちの大事なサッカーも失われていたかもしれない。

「まだ言ってるのか、狩屋は。もうその話は天馬や神童、皆で決めた事だろ？俺たちはあの力を、サッカーを守る為に、歴史上の偉人や各世界の人や生物から借りていただけなんだ。自分たちの力じゃないモノを普段のサッカーで使うわけにはいかないんだ」

そう狩屋に言ったのは霧野センパイ。同じく時空最強イレブンのメンバーとして、歴史上の偉人とミキシマックスしていた中の一人だ。

霧野センパイが言ったことは事実だ。

俺たちは未来での戦いが終わった後、ワンダバに頼んで、ミキシマックスのオーラを全員身体から解除してもらった。

あれはあくまでサッカーを守る戦いの為に借り受けていた力だから、普段のサッカーで使うのはおかしいと感じていたからだ。

勿論、オーラの取得の際に得た化身アームドや各技量、技術は残っているが、もう時空最強イレブンだったメンバーの中にそのオーラは残っていない。

「わかってますよー。少し勿体ないと感じてるだけですって」



「まあ、あれは未来の技術であって、本来俺たちが得て良いものではないからな」  
「それを言ったら、化身アームドも結構先立った力だとは思いますがね？」

アハハ、と、信助の一言で全員吹き出す。

「……やつぱり、サッカーは良いな。」

今まで決められた勝敗で戦う現状を突き付けられたり、いきなり未来人が来てサッカーを消去されそうになったりと色々あったけど、こうして普通のサッカーで皆笑顔になれる。そんな何気ない雰囲気が一番好きだ。

これからも雷門サッカー部は続くけど、このメンバーと一緒に、サッカー続けられたら良いな……。

「皆……今日の練習はここまでです！」

「しっかりと汗拭いて、水分補給しろよ……！」

そんな事を考えていると、マネージャー達から練習終了の声が掛かる。

皆がベンチに戻る中、俺は少し遅れてマネージャーや監督の待つベンチへと足を歩めたのだった。

――その翌日。

雷門サッカー部にある一報が届くのだが、この時の俺はまだ知る由もなかった。

## 【第1章】世界トッププレイヤーへの挑戦

### 第一話 新たな挑戦

「親善試合……ですか？」

ミニゲームをおこなった翌日の放課後。

練習開始前に急遽ミーティングをおこなう事になった俺たちは、雷門中サッカー棟のミーティング室で、テレビモニターの前に立つ円堂監督からそのような話を聞いた。

「ああ。これは少年サッカー協会に正式に申し入れがあった話だ。とある海外の強豪チームが、日本一の中学との試合を望んでいるらしい」

「日本一の中学と言ったら……」

「まあ、俺たちの事だよな」

円堂監督の言葉に、速水センパイと浜野センパイが言葉を漏らす。

確かに、今年の中学サッカー日本一を決める大会、ホーリーロードで優勝したのは俺

たち雷門中だ。

まあ昨年は準優勝だったわけだから、今年に限って、と言うのが付き纏うが、それでも現王者なのには変わりない。

——しかし。

「時期的にも、いきなりの話ですね。今までも海外チームからそのような申し出がなかったわけではありませんが、大体は全国大会が終わってすぐにおこなうのが通例だったはず。今年は色々とありましたが、それでももうあれから何ヶ月も経っていますよ？」

そう。それに確かここ3年ほどは、そのような申し出も無かったはずだ。

「まあ神童の言う通り、今年は聖帝選挙の影響で中学サッカー界にとつても大きな変革期ではあった。ただ、それを踏まえても、この時期に申し出をする相手の意図は俺にもわからん」

「この話……監督は受けるんですか？」

「それを決めるのは俺じゃない。勿論、時期が時期だけに少年サッカー協会の方も強制

はしないらしいが、やるかやらないか、決めるのはあくまでお前達だ」

「ワシはどちらでもええが……」

「相手がどんな思惑かもわからねーからな。安易に決めるのもダメだと思うぜ」

「で、でも、断つたら日本サッカー界の印象悪くしちゃいませんか……?」

皆が思いつきの意見を出す。

そんな中、腕を組み悩んでる様子であつた神童センパイが俺の方を向き、口にする。

「……天馬、このチームのキャプテンはお前だ。お前の考え、意見に俺は従うつもりだ」

「……そうだな。俺もそうするよ」

と、神童センパイの言葉に続き、霧野センパイも同意する。

その言葉に皆同意なのか、皆の視線が俺に集まる。

俺の……考え。

確かに、色々と不審な点はある。いきなりの事だし、相手側にどんな意図があるのかはわからない。

でも、それでも俺は——。

「……俺はこの試合、やりたいです！」

俺は円堂監督を、雷門の皆を見て、自分の思いを話す。

「確かにいきなりの事で混乱はしますけど、でも、俺は世界に自分たちのサッカーが通用するのか試したい！世界のサッカーがどんなモノなのか見てみたい！きつとそれは、体験してみないと分からないんですよ！今、世界のチームと戦えるチャンスがあるなら、どんな思惑があっても、俺は試合を試してみたいです！」

「……うん、うん！僕も世界がどんなシュートを撃つのか見てみたいし、自分がそれを止められるのか試してみたい！やろうよ、天馬!!」

俺の言葉に信助がそう同意してくれる。

そんな俺たちの様子を見て、周りも同意するかのようには笑みを浮かべる。倉間センパイや狩屋はやれやれと言った感じだけ……。

「……ま、天馬くんならそう言うと思っていたよ」

「つたく、こつちが色々と考えてたのが馬鹿らしくなってるぜ」

……ま、まあ表情は悪くないから大丈夫だよね？

「よし！じゃあ少年サッカー協会の方には試合を受けると言う事で話を進めるぞ！……  
但し、やるからには勝ちに行く！試合までの一週間、しっかりと調整してくぞ！」

「「「はいッ!!」」」」

よーし！そうと決まったら早速練習だ！

そう意気込みつつ、ミーティング室を出ようとした時、神童センパイが何かに気付いたようにで円堂監督に問いかける。

「そういえば監督。その相手チームは何処の国のチームなんですか？」

「ああ、相手は——」

ローイタリアだ」

l Side out. 松風天馬

◇◇◇

「……………そうか、やはり受ける事にしたか」

「ああ。アイツら、すっげーやる気になってるぜ」

少年サッカー協会 会長室。

雷門がイタリアチームとの親善試合を受けると決めた日の夜。円堂守はここ、少年サッカー協会 会長室まで足を運び、かつてのチームメイトであり少年サッカー協会 現会長の豪炎寺修也に、直接試合を受ける旨を伝えた。

「世界の強豪チームと戦える機会も、近年あまりないからな。俺たちの世代だって、FF Iが無ければそんな機会はなかったし、日本は他の国からしたら弱小国として見られてただろうしな」



「……近年、そういう申し出が無かったのも、やはり管理サッカーが良い意味でも悪い意味でも、日本全体のサッカーレベルを平均的に保っていたからだろうな。あのような管理下では、日本全体のレベルは保てても、爆発的な成長は見込めないというのは、天馬達を見てよく分かった」

勿論、サッカーが社会的地位までも定めてしまう現状だったからこそその管理サッカーだったのだが、それは個々の選手の才能までも抑えてしまう事に繋がる。

恐らく、その影響を直に受けていたのが、雷門中の神童拓人であろう。

少なくとも一年の頃の彼のままであれば、剣城京介の化身による共鳴があっても、化身使用に覚醒はしなかったはずだ。

そのきっかけを作ったのが……。

「……松風天馬。今の私なら、彼が雷門に来て本当に良かったと思っている」

「……まあ、アイツがサッカーを始めるきっかけになったのはお前だ。今思えば、アイツが雷門に来るのも、革命カゼの中心となるのも、必然だったのかもしれない」

円堂の言葉に豪炎寺はフツ、と笑みを浮かべる。

「雷門が起こした革命は、確実に日本の少年サッカーに強い影響を与えている。今度の親善試合も、世界へと視野を向けた新たな一歩になるだろうな」

「……………もしかしたらコイツも、それを望んでいるのかもしれないな」

そうやって豪炎寺が出したのは一枚の紙。

デスク上に出された紙を自身の手で取り、その内容を理解する。

「これは……………今度のイタリアチームの選手名簿か？」

「ああ、そうだ。今日送られてきて……………監督名を見てみる」

「監督……………？ツツ！まさか、アイツが……………!？」

そこには、円堂守、豪炎寺修也両名がよく知る人物の名が記載されていた。



l Side. 松風天馬

—— 一週間後、試合当日。

『さあ！本日ここホーリーロードスタジアムでは、イタリア屈指の少年サッカー強豪チームであるチーム「ブレイブニール」と、日本が誇る名門校「雷門中」との親善試合が、間もなくおこなわれます！』

ワアアアアツと、実況者の声に続き、ホーリーロードスタジアムに集まった観客の歓声が響き渡る。

既に俺たち雷門イレブンは、スタジアムの自陣ベンチに出ており、ウォーミングアップをしながらイタリアチーム「ブレイブニール」の入場を待っている。

「しかし急に決まった試合だというのに、こんなに観客が集まるとは……」

「近年稀に見る海外チームとの試合ですからね。日本の少年サッカーの人気もあって、注目は高いんじゃないでしょうか」

10年前。第一回と称して開催された世界大会、フットボールフロンティアインターナショナルで円堂監督たち日本代表が優勝した事で、日本における少年サッカーの人

気、注目度は高くなっている。

しかし、その10年前の世界大会の裏で起きた事件の影響で、数年毎に開催されるはずだったFFIも、ここ10年開催されることはなかった。

それにより日本の少年サッカーでは年に数度の海外チームとの試合でしか世界を相手に戦う機会がなく、それもここ数年の管理サッカーの影響からかパツタリと途絶えていたらしい。

とはいえ、まさかこんなにも集まるとは……。

「よし、皆一旦集合だ！」

円堂監督から集合するよう言われ、各自アップしていた俺たちはベンチ前に集まる。

「いいか。相手のチーム【ブレイブニール】は個々のレベルがかなり高い。個々の完成度からいえば、おそらくお前たちよりもずっと格上だろう」

しかし、と円堂監督は続ける。

「お前たちはいつどんな時でも、チームで色んな修羅場を乗り越えてきたはずだ。ホーリーロード、未来での戦い、それら全部の経験使って思いつきりぶつかってこい！そして、思いつきり楽しんでこい！」

「「「はー！！！！」」」

円堂監督の言葉で、俺たちの気持ちは一段と引き締まる。

今回は親善試合という事もあり、円堂監督はあまり指示は出さないらしい。あくまで自分たちの力で、世界という相手を肌で感じてきて欲しいようだ。

「よおおおしツ、みんな！サッカーやろおおぜえええ！！！」

「「「「おおお！！！！」」」」

◇◇◇

\*雷門中

F W 剣城 倉間

M F 浜野 神童 錦

控え	G	D	
	K	F	
西園		車田	天馬
影山		霧野	
速水	三国	天城	
青山		狩屋	
一乃			

## 第二話 それぞれの挨拶

l Side. ???

「はあ……まだかしら？イタリアチームの入場は」

ホーリーロードスタジアム観客席。

私は今日この場所でおこなわれる、イタリアチーム【ブレイブニール】とホーリーロード前大会で優勝した雷門中との親善試合を観に、このホーリーロードスタジアムに足を運んだ。

既に名門校雷門中のメンバーは自陣ベンチに出てきており、各々アップを始めている。

どうやら、イタリアチームは諸事情で遅れているらしく、試合開始にはもう暫く掛かるようだ。

ふと、雷門中陣営のベンチに視線を移すと、どうやら円陣を組むところのようだ。

『よおおおしツ、みんな！サッカーやろおおぜえええ!!』  
『『『『『おおお!!』』』』』

今の声は、今年雷門中に入学したばかりの一年生であり、今年のホーリーロード決勝からキャプテンを務めてる、松風天馬という男のモノのはずだ。

これでも私はサッカープレイヤーの端くれであり、少年サッカーの全国大会であろうと一応一通りチェックしている。……と言つても、流星に地区予選を見る程暇しているわけではないが。

松風天馬に対する私の第一印象は、何というか、器用の一言に尽きた。

あのホーリーロード本戦のトリツキーなスタジアムに対する適応力、柔軟な発想力、何より彼は、全国という舞台でデيفエンス、ドリブル、シュート、更にはキーパーまでもこなしてしまうという、一年生ながら凄まじい活躍を見せていた。

噂によると、入部当初はドリブル以外まるつきり初心者だったとか。何それチートじゃない？

挙げ句の果てに彼は、準決勝で自らの化身を進化させるといふ異業を成し遂げてしまった。少なくとも私は、化身が進化するなんて話は聞いたことがなかった。

ただそんな彼が、キャプテンに向いてるかと言われたら答えはNOだ。特に、あの決



勝戦の時点ではとても向いてるようには見えないだろう。

それでもあの雷門の監督——伝説のGKと言われた円堂守さんや、他の雷門の先輩たちが認めているということは、前キャプテン以上何らかの影響を与えているのである。

「——松風、天馬」

……どうやら、私が考え事をしている間に「ブレイブニール」の選手達が入場していたようだ。

現在、円堂守と握手をしているのがイタリアチームの監督みただけど……まさかあの選手といい、どうやらわざわざ足を運んで観に来た甲斐があつたみたいだ。

l Side out. ???

◇◇◇

l Side. 松風天馬

『スタジアムにいる観客の皆さま、長らくお待たせしました。まもなく、イタリアチーム

『ブレイブニール』の選手入場です！』

遂に来た……ッ。

何やら諸事情で遅れたみたいだけど、いよいよ、イタリアの強豪チーム『ブレイブニール』の選手達が来る。

俺や雷門の皆、そして観客の視線が選手入場口に集中する。

まず始めに出てきたのは、顔立ちの整った男性……おそらく『ブレイブニール』の監督であろう人がスタジアムに入ってくる。円堂監督や豪炎寺さん達と同じくらいの年齢に見えるがあの人が、何処かで……？

しかし疑問も束の間。次に入場してきた選手を見て、俺は驚きを隠せなかった。おそらくこれは俺だけではないはず。

「え……う？女の子!？」

そう。入ってきたのは、少し長めの髪を後ろに纏めたであろう栗毛色の女の子だった。しかも、驚くのはそれだけじゃない。

「……それも左腕にキャプテンマークがあるとと言う事は、彼女がこのチームのキャプテンなのか」

神童センパイも驚きつつ、その事実を言葉にする。

イタリアでも強豪チームと言われている「ブレイブニール」。それを纏めているキャプテンがまさか女の子だとは思ひもしなかった。

次々に「ブレイブニール」の選手達が入場する中、キャプテンマークを身につけた女の子は真つ先に俺の方に近付いて、笑みを浮かべながら手を差し出す。

「貴方がこのチームのキャプテンかしら？……初めまして。私が「ブレイブニール」のキャプテン、フィリア・サンデー口よ。……今日はごめんなさい。急な申し出だった上に遅れてしまって」

「あ、い、いえ、俺たちは全然大丈夫です！……えっと、初めまして。雷門中キャプテンの松風天馬です。今日はわざわざ、日本までありがとうございます」

俺は差し出された手を握り、握手を交わす。し、身長高いなあ……剣城くらいはあるんじゃないかな。

少し緊張気味に挨拶をすると、不意にフィリアさんは笑い始めた。

「ふふ、貴方達の反応見てたら、何となく察したわ。女子の私がキャプテンなのに驚いているのかしら？」

「え!? あ、いや、その……」

「気にしなくていいわ。そう思われたのは今回に限った事じゃないから。――勿論、男子しか出られないようなリーグとかだと、私は試合に出る事が出来ないけど、基本的には私がキャプテンとしてチームを纏めているわ。それに、そういう試合の時は……ジユラーノ！」

そう口にしたフィリアは、急に「ブレイブニール」選手達のいる方へ向くと、誰かを呼び出す。

呼ばれた男はフィリアよりも背が高く、同年代とは思えない体の持ち主だった。

少し目つきが鋭いが、美形とも言える顔立ちの男がフィリアの隣に立つと、その男を紹介し始めた。

「彼の名前はジャンカル・ジユラーノ。このチームの正GKで、私が試合に出られない時

の臨時ゲームキャプテンなの」

「初めまして、ジャンカル・ジュラーノだ。どう呼んでもらっても構わない。今日はよろしく頼む」

「は、初めまして。キャプテンの松風天馬です。今日はよろしくお願いします」

それなりの身長差で威圧感を感じつつも、握手を交わし挨拶をする。

「……さて、私たちのせいで時間も押しているでしょうし、私もそろそろ戻るわ。今日はよろしく願いますね、松風天馬さん」

その言葉を最後に、ジャンカルさんと共に相手ベンチに戻って行ってしまった。確かに時間的にもそろそろ試合が始まるだろう。

「な、なんかもうちよつと怖そうなイメージだったけど、なんか拍子抜けというか……」  
「それでもないぞ、影山」

今の様子を見ていた輝が漏らした言葉に、剣城が口を挟む。

「……うん。正直、あのフィリアをドリブルで抜けるイメージが浮かばない」  
「ああ。あのジャンカルというGKも、見た目以上に相手手強そうだ。俺のシユートが通用するかどうか」

実際に言葉を交わした事で感じた率直な俺の思いに、剣城も同じように感じていたよう  
うで同意する。

これが世界トップクラスのプレイヤー、か。

……凄いな。

今からこんな凄い人達とサッカーが出来ると思うと、自然と口元が緩む……っ。

「さあ、みんな！ポジションに就こう!!」

この高ぶった思いを旨に、俺たちはそれぞれのポジションに就いた。

Side out. 松風天馬



「やあ、マモル。久しぶりだね」

松風天馬とフィリア・サンデーロの両キャプテンが挨拶をしていた時。

「ブレイブニール」の選手達を率いて入場した監督が、円堂守の姿を見ると真つ先に近づき、そのように挨拶をしてきた。

「まさかお前が監督になっていたなんてな——フィデオ」

フィデオ・アルデナ。

イタリアの『白い流星』と呼ばれ、かつて、円堂守がキャプテンを務めたイナズマジャパンと、世界一の座を掛けて戦った、イタリア代表オルフェウスの元副キャプテン。

チームを離れていたキャプテンの代わりにチームを纏め上げ、オルフェウスをFFIベスト4にまで導いた選手だ。

一時期はプロの第一線で活躍していた選手だったが、不慮のアクシデントで利き足を故障してしまい選手生命を絶たれてしまう。

「足はもう大丈夫なのか？」

「日常生活を送る分にはもう何ともないよ。……と言つても、サッカーのような激しいスポーツはもう無理だけどね」

「……またお前のシユート、受けてみたかつたぜ」

「すまない、マモル。……でもオレの意志は、彼女達が引き継いでいる。その為になつたんだ、監督に」

そう力強く口にするファイディオの視線の先には、ポジションに就き始めるフィリアの姿があつた。

「……そうか。でも天馬達も、俺らの魂をしっかりと受け継いでいる。ファイディオ達が思っている以上に手強いぜ？」

「ああ。今日改めて本人たちを見て、感じたよ。それは、彼女も同じだとは思うけどね」

「良い試合にしよう、ファイディオ」

「勿論。今日はよろしく頼む」



互いにそう口にし握手を交わした事で、それぞれのベンチに戻っていく。  
丁度両チームがポジジョンに就いたところで、日本とイタリアの親善試合は、イタリアボールからのスタートで幕を開けた。

◇◇◇

―Side. 松風天馬

「――先ずこれは、挨拶代わりです」

それは、試合開始のホイッスルが鳴った直後の一瞬の出来事だった。

イタリアボールから始まった親善試合。

味方からボールを受け取ったフィリアのその一言と共に、フィリアの足元からボールが消える。

――刹那。

「ツツ!?!」

「くツ………何だ!?!」

俺たちの横を、物凄いスピードの何かが通り過ぎていく。

突然のことで反応が遅れ、その何かはサッカーボールである事に気付くのに、コンマ何秒か遅れてしまった。

「まさか、いきなりシュートを……!?」

「ッ、三国センパイ!!」

センターラインから撃たれたシュートは、あつという間にディフェンスの最終ラインを抜け、ゴール前まで突き進む。

距離があつたおかげで俺たちよりも早くシュートに反応出来たのか、三国センパイは必殺技の構えに入る。

右拳に込めたオーラを爆炎へと変えジャンプし、回転と落下のエネルギーを加えてシュートを地面に押さえ込んだ。

『うおおおおお!!爆!バーニングキャッチイイイ!!』

初めて見たときとは比べ物にならない爆炎を纏ったエネルギーで、シユートの威力は次第に落ちていく。

完全に威力を相殺したところで、両手でしっかりとボールを掴み抑えた。

「……ッ、なんてシユートだ」

「ああ。しかも今のはセンターラインからのシユートだったから良いが、あれがペナルティーエリアの中からのシユートだったら……」

「……入っていたかもしれない。」

それは、今のシユートを見た全員が感じた事だった。

これがイタリアチーム「ブレイブニール」のキャプテンで、10番<sup>エース</sup>を背負う彼女の實力。

まだ試合は始まったばかりだというのに、世界のサッカーレベルというのを肌を感じた瞬間だった。

「……さあ、見せてもらいましょうか。日本一のチームの實力を」

## 第三話 剣を継ぎし者

「みんなー!!試合はまだ始まったばかり!切り替えて行くぞ!!」

何処か委縮していた皆に声を掛け、俺自身も気持ちを切り替える。

格上なのはわかっていた事だ。

俺はキャプテンなんだから、俺がもつとしつかりしないと……ッ。

「よし、みんな頼んだぞ!」

ボールは三国センパイからDFの霧野センパイ、そしてそこから俺へとパスが回ってくる。

先ずはオフエンスだ。

相手のフォーメーションは、DFが2人でMFに人数の比重を寄せている。

一見して超攻撃型布陣だけど、あの中盤に寄せているフォーメーションが難儀となっている。生半可なオフエンスでは、アレを抜ける事はできない。

だけど逆に、あの中盤さえ抜ける事が出来れば、後は剣城や倉間センパイがシュートを決めてくれるはずだ。

『さあ！DFの霧野からのパスを受け取ったキャプテン松風が、そのままドリブルで上がっていく！一方ブレイブニールの選手はディフェンスラインをやや下げ、中盤の守りを更に固くするようだ！』

「錦センパイ！」

「おう！任せるぜよ！」

センターラインまでドリブルで持ち込んだところで、比較的守りが手薄なサイドにいる錦センパイへとパスを出す。

ボールを受け取った錦センパイにサイドのMFが付くが、得意のボールキープで奪われる事なく、そのままMFを躲した。

「へへ、大した事ないぜよ！」

「錦！こっちだ！」

守りの固い中盤を走る神童センパイの指示で、ボールを中へと戻す錦センパイ。

神童センパイはそのパスをワンタッチで前線へ回すと、そのボールをディフェンスラインから抜けた倉間センパイが確保した。

『神童の意表を突いたパスで前線へと運ばれたボールは、FWの倉間が確保！これは雷門、絶好のチャンスだあ!!』

『はあああああ！サイドワインダーV3!!』

空中で左右の回転の掛かった倉間センパイの必殺シュートは、蛇のようなウネリのあがる軌道を生み出しそのままゴールへと向かう。

その必殺技に対し、相手のGK ジャンカル・ジユラーノは構え、そして――。

「……フツ。はあああああッ!!」

両手でガツチリと、技の威力を抑え込んでしまった。

『な、なんと！倉間の渾身のシュートは、ゴールならず!!イタリア「ブレイブニール」の

正GK ジャンカル・ジュラーノによって、完全に封じられてしまったああ!!』

「なに!?!」

「倉間のシユート在必殺技無しで止めるとは……」

「更に上の威力のシユートでなければ通用しないという事か……ッ」

倉間センパイはパワーよりもテクニクで撃つストライカーだけど、あの進化した必殺技シユートも相当の威力があつた。

あれを超えるとなると、パワー寄りの剣城のシユートか……あの力を使った必殺シユートしかない。

「さあ!上がれ!」

「ッ!しまった、戻れ!」

ジャンカル・ジュラーノのロングスローで、一気に攻守が入れ替わる。

神童センパイの一声で前線へと上がっていたメンバーは急いで自陣に戻ろうとするが、相手の中盤の選手に対応すべくラインを上げていた為、一気に攻め込まれてしまった。

『あーっと！果敢に攻めていた雷門だったが、一転して大ピンチとなつてしまつたああ！中盤の守りを固めていたブレイブニールであつたが、今度はMFとFWによる怒涛の攻め！これを止めるのは至難の業だぞお！』

「くそ……ッ、攻守の切り替えが速いッ。まるで中盤を固めていた人員が、爆発的に一気に放出されたかのような攻めだッ」

「デイフェンス！しつかり止めるド！」

「言われなくてもわかつてますよ！」

……ッ、これがブレイブニールの攻め。

5人のMFとFW陣による縦横無尽に飛び交うキラーパス。あれだけ鋭いのに正確に相手の足元へパスが飛び交っている！

何とかしてこの勢いを止めないと……ッ。

天城センパイや狩屋達はすぐ様デイフェンスに入るが相手のMF、FW陣の人数に対応する事が出来ずにいる。

デイフェンス間を抜けていくパスは遂に最前線のフィリアへと渡り、三国センパイと一対一になる。



「く…………ツ」

「……確かに何人かは世界でも通用する、レベルの高い選手がいるよね。チームとしての完成度も高い。……でも」

そう口にしたフィリアは、ボールにエネルギーを収束させる。

収束したエネルギーを込めたボールは神々しい輝きを放ち、その強力なオーラはフィールド中に行き渡った。

『これがフィディオさんの認める日本の実力、か。……オーオーインソード!!!』

フィリアの撃ち出したシールドは神々しい剣（つるぎ）と化し、そのままゴールへと突き進む。

あれだけのオーラを帯びていただけあって、かなりの威力のシールドだ。下手したら、並の化身シールド以上のパワーかもしれない。

そんなシールドに対し三国センパイは、両腕をクロスさせ、振り下ろした一瞬で両手に赤いオーラを凝縮させる。

そして左手で右手を掴む事でそのオーラを右手に集め、絶大となったオーラと共に右

手を突き出した。

『絶ッ！ゴッドハンドX!!!』

未来人との戦いの中で、円堂監督のおじいさん——円堂大介さんから伝授されたゴッドハンドの強化版、ゴッドハンドX。

その力を特訓によって限界近くまで進化させた、現状三国センパイの最強の必殺技とも言える切り札。

赤く形成された巨大な手で、フィリアのオーデインソードを受け止める。

強力なシュートを前に何とか堪える三国センパイだけど、徐々に押され始めた。

やがて完全にパワーで押されてしまい、ゴッドハンドXで形成されたオーラが粉碎してしまう。

神々しく輝くシュートは、そのままゴールへと突き刺さる——その手前。

「させるかああああ!!」

ズガンッ!!

こちらのディフェンス陣を翻弄するかのような攻め、直接こちらの攻めに関わって  
なかつた事、そして——三国センパイのブロック。

これらの要因で誰よりも早くゴール前まで戻れた俺と劍城は、脚に僅かながら炎を纏  
い、フィリアのシュートをブロックする。

三国センパイのゴッドハンドXの性質上、前に飛び出す為出来たブロックだ。

「はあああああああアツ!!!」

ツインシュートのように左右からブロックされたシュートは、2度のブロックを経て  
威力が弱まり、上空へと弾かれてしまう。

ボールの勢いに俺たちも弾かれて体勢を崩すが、瞬時に立て直した劍城が上空へと  
ボールを追い、コート上の外へと出した。

『おーつと!!フィリア・サンディーロのあの強力なシュートを!三国、劍城、そして松  
風の三名で防ぎ切ったああ!!三国の新たな必殺技、ゴッドハンドXのパワー!そして  
前線にいた松風、FWの劍城がゴール前まで戻ってシュートブロックという素晴らしい  
判断力!これぞ日本の、雷門の底力だあ!』

「くっ……すまない、二人とも。助かった」

「い、いえ、三国センパイがシュートの威力を抑え込んでくれたお陰です。それに、多分俺一人じゃ止められなかったですよ」

先程ボールに弾かれ尻餅をついてた俺は、三国センパイの手を借りて立ち上がる。

……三国センパイのゴッドハンドXでそれなりに威力が落ちていたはずなのに、俺と剣城の二人掛かりでも、精々ボールを弾くのがやっとだった。

あの後瞬時に剣城がボールを確保して外に出してくれたから良かったもの、あのまままだつたら再びファイリアがボールを確保して、そのままシュートを撃っていたはずだ。

「よく止めたわね、松風天馬さん」

「ファイリア……」

「正直、止められるとは思ってなかったわ。私も、結構本気で撃ったつもりだったから」

「……あれが貴方の本気、という事ですか」

「ええ、そうよ。10番さん？」

あれが、ファイリアの本気。

……俺は未来での戦いで、それなりにレベルアップしてきたつもりだった。沢山の強敵たちと戦ってきたし、ミキシマックスはともかく、化身アームドや数々の必殺技は、あの戦いで自身の成長の証だった。

でも目の前には、そんな俺……いや、俺たちよりもっと凄いプレイヤーがいる。これが、今の世界レベル……ッ。

「……10年前。確かに世界の少年サッカーの頂点に立ったのは、貴方達日本だったわ。私も当時から見ていたし、あの決勝戦は素晴らしいものだった」

そう口にしたフィリアの視線は、俺たちのベンチにいる円堂監督に向ける。

「でも、あれから10年。あのFFIをキツカケに、世界の少年サッカーのレベルは日々進化している。いつまでも、日本が頂点に立っているわけではないのよ」

……その言葉に、俺たちは何も言い返せないまま、フィリアは自身のポジションへと戻っていった。

——その後プレーが再開されるが、ファイアたちの計算されたクリアパスに寄る攻めに俺たちは防戦一方となり、最終的に3-0で前半を終えるのだった。

l Side out. 松風天馬

◇◇◇

l Side. ファイリア・サンデイロー

——正直、止められるとは思ってなかったわ。

この言葉は本当のこと。

試合が始まってから一度の攻めしか見てないけれど、それでもある程度の動きで相手などの程度のレベルかは判断できる。

実力は認める。

彼らの何人かは世界に通用するという言葉にも嘘はない。

それでも今は、私たちのチームの敵ではないし、私のシュートを防げるとは到底思っ  
てなかったわ。

「オーオーディンソード。」

この技は、私たちブレイブニールの監督であり、私にサッカーを教えてくれた師匠でもあるフィディオさんの代名詞とも言える必殺シュート。

私をFWとして育ててくれた際に初めて教えてもらった、私にとつても一番馴染み深い技でもある。この技を原点に、私というFWを育て上げたと言っても過言ではない。

……それだけに、アレを止められたのには少々胸が痛んだ。

「これが、日本……」

私の視界に映る、小さなキャプテンを見ながら、ふと呟く。

少々キツイ言葉を口にしたが、彼やその仲間たちを見ると、不思議とまだ彼らのレベルを決めつけるのは早計かもしれないと思ってしまう。

「……この試合をキツカケに成長する。」

そんな予感がしてならない。

「……もしかしてそれが狙いですか？ フィディオさん」

……今回の試合は、私たちにとっても急な話だった。

フィデオさんの提案。

その訳を最後まで口にしなかったフィデオさんだったけど、そのように思ってしまう。

でも、もしそうであるなら尚更負けるわけにはいかない。

——例えあの力を使つても、勝つのは私たちブレイブニールよ。

—Side out. フィリア・サンデイロー

◇◇◇

—Side. 松風天馬

——前半が終わり、ハーフタイムの控え室。

全体的にディフェンスラインを下げて、守り一辺倒でなんとか得点を3失点に抑えて前半を終えたが、やはり皆の消耗も激しい。



相手の攻めは変わらずキラーパスに寄るMF、FW陣の突破だが、これがかなり厄介だ。

相手はこちらが反応しづらいところを瞬時に把握しパスを出している為、分かつていてもパスをカットする事が出来ない。

しかも全員それなりにキック力があるから、下手にトラップしようとしても弾かれてしまう。そこを確保されてローの繰り返しだ。

しかもこちらが攻めれば中央の守りを固め、ボールを確保したら即座に倍以上の人数で攻められる為、ディフェンスが間に合わない。

この凄まじい運動量をあまり息も乱れず行なうのだから、恐ろしい。何か独特の動きでもあるのだろうか……？

「くそつ、あのキーパー……セーブ力が異常過ぎる！俺のサイドワインダーで色んな角度から攻めてるのに全部止められちまうッ」

「……相手のDF二人も厄介ですね。必殺技が無くてもあんなブロックが入れば、あのキーパーなら容易く止めてしまう」

倉間センパイ、剣城のFW組がそんな苦言を漏らす。

そう。俺たちもあれからサイドを使って、何度かシュートチャンスがあったんだけど（その度にカウンターを決められたが）、まずテクニク系の倉間センパイのサイドワインダーで際どいコースを攻めても、あのキーパーには通用しなかった。

あの体勢からあの威力を止めてしまうととなると、サイドワインダーそのものが通用しないとダメかもしれない。

そして、前半終了間際に剣城にボールが渡り、必殺技デビルバーストを撃つことが出来ただけ、そのシュートに対して相手のDF二人がシュートブロックを掛け威力が弱まり、結果的に相手キーパージャンカルに止められてしまった。

「……恐らくあの陣形から、サイドから攻められるのは折り込み済みなんだろう。サイドから上手くゴール前まで持ち込んでも、DF二人が先回りしてシュートをブロックするといったところか」

「倉間のシュートは色んな角度から来るから掛けられなかったが、剣城の真正面から来るパワーシュートにはブロック出来るということか」

「で、では、敢えて最初の攻めのように中央から行くとか……？」

「いや、あの手はもう通じないだろうし、中央からの突破は多分俺や天馬でも厳しい。俺の神のタクトもあの中では効果が薄いしな」

神童センパイと霧野センパイの言葉に輝がそう提案するが、同じく神童センパイにそう返される。

確かに、パス込みで攻め込むなら何とかなるかもしれないけど、下手したらパスはカットされるし単独突破は流石に無理がある。

同じ理由で、神童センパイの神のタクトやFファイアイリューションIでも、結局スペースがないから厳しいはずだ。

「じゃあ！アルティメットサンダーは!?!あれなら自陣に戻して撃てるし、相手のディフェンスを一気に崩せるんじゃない？」

「！それだよ信助！確かにアルティメットサンダーなら……」

「……いや、確かに可能性はあるが、フィリアのキック力を加味すると、そのパワーを利用されかねない。アレを更に蹴り返されたら、幾ら剣城でも更に蹴り返すのは不可能だろう」

……つ、確かに、あのフィリアのシュートを見た後だとその可能性も否定できない。アルティメットサンダーは、4人の選手のキックで徐々にボールにパワーを蓄積させ

ながら自陣に戻し、5人目の選手がそのボールを相手陣内に撃ち込むことで、蓄積されたパワーを相手陣にぶつける必殺タクティクスだ。

蓄積するエネルギーが物凄いから、5人目の選手も相当のキック力、そのパワーに耐えられる足腰が必要となる。今のところその役目を果たせるのが、劍城と輝。まあ化身アームドすれば俺や神童センパイ達でも出来ると思うけど……。

神童センパイが想定してるのは、その蓄積されたエネルギーをフィリアが撃ち返す、もしくは必殺シユートでエネルギーを加算させてシユートを撃つ、といったものだ。

「じゃあ後半は、どうしたら……」

信助のその一言で、誰もが言葉を失う。

もう前半だけで、世界のレベルを嫌ってほど見せつけられた。

相手の動きになす術もなく、今の俺たちには対応できないかもしれない。

……でも、まだ何か。

「……まだ何か、やれる事はあるはずです」

静寂した中呟いた俺の言葉に、皆の視線が集まる。

「相手の動きに対応できないなら、何か、足掻いてみましょうよ！まだ前半が終わったばかり、諦めるには早過ぎると思うんです！」

「……しかし、策がなければ何も」

「だったら！俺はとにかく走りまくります！」

へ？……つと俺の言葉に全員が疑問符を浮かべた。

「走って走って走りまくって、相手にボールを触らせないくらいドリブルで抜きまくって見せます！そうすれば、絶対に勝てます！」

「いや……幾ら何でもそれは無理だろ」

「そのくらいの気持ちでやるんですよ！……確かに相手は強いです。でも、だからってなにもしなかったら凄く勿体無いです！諦めずに足掻けば、きっと何か道は開けます！諦めなければ、なんとかなるはずですよ！」

これまでだってそうだった。

どんなに強い相手でも、諦めなかったから道は開けた。

皆と一緒に一緒だったから、あのホーリーロードやラグナロクでも戦い抜くことが出来たんだ。

俺の言葉に皆驚いた表情を浮かべていたが、不意に円堂監督が笑い声を上げた。

「あははは！天馬らしいな……確かに、まだ諦めるには早過ぎる。まだ皆、自分のサッカーの全てを出し切れてないだろ？」

「監督……しかし」

「わかっている。相手は想像以上に強い。でもお前達だって、相手の力に対抗出来るだけのモノはしっかりと持っている。あとはそれを、どう活かすかだ」

どう活かすか……？

円堂監督はそう口にして椅子から立ち上がると、ホワイトボードの前に立つ。

「試合前にも言った通りあまり口出すつもりはなかったんだが、今回は相手が相手だ。後半からの指示を伝える」

と、ホワイトボードに何かを書きながら、円堂監督は次のように述べた。  
これは、フォーメーション……ッ!?

「後半からはメンバーを変えていくぞ。後半の鍵になるのはズバリ……」

——1年の5人だ」



\*雷門中 後半フォーメーション

F W 劍城 天馬

M F 西園 影山 狩屋

D F 神童 錦

車田 霧野 天城

G K 三国

控え  
倉間  
浜野  
速水  
青山  
一乃



## 第四話 一年生の底力

『……後半が始まって10分ほど経ちますが、前半同様厳しい展開の続く雷門。しかし大分対応出来てきているのか、シユートは未だにゴールポストに収まっていません！後半から変えてきた、異様なフォーメーションの雷門ですが、はたしてこの陣形の意図とは!？』

実況の口にする疑問。

それは、このスタジアムにいる観客全ての気持ち言葉を言葉にしたモノだった。

本来MFである錦は元より、司令塔である神童までもがDFに下がるといふ雷門にとつては異例の出来事。

そして肝心の攻撃の要であるMF、FWは、なんと雷門サッカー部に所属する一年生全員を起用するという、これまでの雷門になかった形だ。

「……しかも、MFの松風天馬さんがFWになり、その空いたMFの枠に全然違うポ

ジションの子が入ってるなんて……)」

この異様な陣形に疑問を抱いていたのは、相手のエースであるフィリアも同様だった。

彼女も事前に雷門あいての選手データを一通りチェックしていた為、現在MFのポジションで動いている3人が、正規のポジションの人物でない事は理解していた。

そんな異質な陣形に変えてきた雷門であるが、戦況はさほど前半と変わりはない。デイフェンスに人数が割かれているとはいえ、普段とは違うポジションニングに多少なりとも困惑しているようだ。

——勿論、それだけが理由ではないが。

「円堂監督の言葉……一体どういう意味なんだ……？」

そう呟いたのは、現在DFのポジションに就く神童だった。

神童を悩ませていたのは、ハーフタイムの時にこのフォーメーションを口にした、円堂の言葉だ。

——ハーフタイム時、控え室。

『一年を全員、オフセンスに置くという事ですか……!?!』

『そうだ。後半から神童と錦にはデイフェンスに回ってもらおう。そして劍城、天馬。ゴールはお前たちが決めるんだ』

『っ、神童は司令塔です！オフセンス時に神童の指示がなかったら、それこそ……っ』

円堂の指示に反論するのは、DFの霧野だった。……と言っても、口にしてないだけで思ってる事は皆同じだろう。

現に、前半攻められた何回かのオフセンスの指示は神童によるものだった。

そんな神童をDFとしてデイフェンスに回してしまえば、デイフェンスの指示は出来ても攻撃陣への指示は中々難しくなる。

そしてその肝心の攻撃陣は、全員一年生という事実だ。

『錦だつてオフセンスの選手です！普段の形でデイフェンスに回るのならともかく、ポジション毎変えたらまともに連携も取れなくなりますよ!』

『確かにそうだ……が、はつきり言つて、前半のままの攻めではブレイブニールの守りは崩せないぞ』

『……監督はこのフォーメーションに、相手の守りを崩せる術があるかと?』  
『ああ。ローサーつきも言ったが、お前たちにもあのブレイブニールに対抗出来るだけの力は確かにある。このフォーメーションは、それを活かす為のものだ』

円堂からの指示は、それつきりであった。

フォーメーションの指示、そしてこの陣形の意味するヒントらしき言葉。

神童は不慣れながらもデイフェンス陣と上手く連携を取りつつ、円堂の言葉の意図を探っていた。

試合は依然ブレイブニール優勢であり、前半のパスによる怒涛の攻めは、より鋭さを増していた。

キーパー三国の好セーブ、そして司令塔である神童の指示がデイフェンス寄りとなつた事でなんとか抑えられているが、それも時間の問題だろう。

「(とはいえ、あまり長引かせても向こうが何を仕掛けてくるかわからない。ここは一気にローサー) ボールをこっちに!」

このままの状態を良しとしなかったフィリアは、ダメ押しの追加点を取る為、仲間に

パスを促す。

本来あと何度かのパスの末にフィリアにボールが渡る予定であったが、相手のこれまでのデータにない陣形、そして自身のモヤモヤとした気持ちを振り払うかのように、先走った指示をしてしまう。

そしてそれが、これまで完璧なパスで翻弄していたブレイブニールの常勝パターン、その動きを崩してしまった。

「させるかあああああ!!」

「……っ!!」

フィリアの指示でパスが通るところへ、FWとして入っていた天馬のカットが入る。前半の一件から、フィリアに意識が向かっていた為、シュートに入る前のこの一瞬を狙っていたようだ。

ボールをトラップしそのまま確保するはずであったが、ブレイブニールのパスは相手の反応外の場所を突く為、常にシュート並の威力となっている。

更に天馬自身も不十分な体勢であった為、そのボールの勢いに押され弾かれてしまう。

弾かれたボールは、空高く上げられた。

いきなりの事で反応が遅れたフィリアだったがそれも一瞬の事で、直ぐに切り替え空高く上がったボールを追う。

「……ッ、このままシュートにー」

「行かせないッ!!」

しかしそれを防いだのが、後半からMFとして入った西園 信助だった。

持ち前のジャンプ力、そして天馬がボールを弾いた時点で反応していた信助はフィリアよりも早く、高い位置でボールを捉え、一度戦況をリセットする為ヘディングでフィールドの外へと出した。

「(……ッ、私とした事が、勝負を急ぎ過ぎてしまった。ちゃんとした流れで行けてれば、最悪シュートで終われたはずだったのにッ)」

「(……惜しかった反面、危ないところだった。天馬の判断力、スピードが無ければあの一瞬の隙にボールをカット出来なかつただろうし、信介のジャンプ力がなければ、あのままフィリアにボールを奪われていたはずだった)」

この結果に、フィリア、神童が互いにそう判断する。

本来のフィリアであれば、こんな失態は起こさなかつただろう。

しかし、相手の監督はあの円堂守だ。師匠であるフィデオが認め、散々聞かされてきたトッププレイヤーの一人。

この状況下が彼の指示であるものとフィリアは理解していた為、普段の彼女らしからぬプレーを招いてしまった。

今回はそこを突かれてボールを奪われてしまったが、一方の雷門側も攻撃に繋げるまでは至らなかつた。

「(ーーー待てよ。もしかしたら)」

と、そこで神童が何かに気付く。

今の一連のプレー、そして相手のデイフェンスとオフフェンス。

司令塔である彼だからこそ気づいたーーー

ーーー円堂守の言葉の真意。

「天馬！信助！」

気付いたとあれば、後は実行するのみ。

神童はこの作戦の要である2人に指示を出す為、駆け寄った。

◇◇◇

l Side . 松風天馬

フィリアへのパスを弾き、そのボールを信助がフィールドの外へ出した事で、相手のスローインから試合が再開される。

再開後も至って変わらない。

先程のパスカットは、相手の流れが変わり、その一瞬の隙を突いたから出来たけど、もう相手も二度とあんな失態はしないはずだ。

『ディープミスト！V2！』



『アトランティスウォールG3!』

霧野センパイや天城センパイが必殺技で止めようと試みるが、その際相手はパスでの突破から切り替え、個人技でセンパイ達の必殺技を攻略する。

そうして空いたディフェンスのスペースから、フィリアではない別のFWのシュートが放たれる。

ゴールの角隅に向かうシュートは、三国センパイのパンチングで何とか弾く。

しかしその弾いたボールを車田センパイが確保する前に、相手のMFがボールを奪ってしまふ。

ボールはそのままフリーとなつているフィリアへ渡り、今日何度目かの、三国センパイとの一騎打ちになる。

『今度こそ決める……オーディンソード!!!』

神々しく輝くボールを、フィリアは力強く撃ち出した。

前半の失点の内、2点がこのオーディンソードによるものだ。

最初のシュート以降、誰もフォローに入る事が出来ずにゴッドハンドXは破られてい

る。

今回も俺や剣城は神童センパイの指示でゴールから離れているし、DFもまだ万全な体勢ではない。

ーーーしかし。

「これ以上、点はやらない!!」

「ッ！神童センパイ！」

ゴールに向かうオーデインソードとの間に、神童センパイが割り込む。

神童センパイは両手で空を切るように払いクロスさせ、奏でる音を聴くように目を閉じる。

そして向かってくるシュートに対し、何かを見切ったように目を開け、そのまま奏でる音楽の流れと共にシュートブロックに入った。

『アインザッツ!!』

シュートを自身の奏でる音に合わせるかの如く、新たな必殺技でシュートブロックを

かける。

しかしフィリアのシュートの力強さに音を合わせ切る事が出来ず弾かれ、そのままシュートはゴールに向かう。

「くっ、三国さん!!」

『ああ、任せろ!ー!ー!絶!ゴッドハンドX!!』

神童センパイの必殺技で威力が大幅に下がったオーディンソードは、三国センパイの絶ゴッドハンドXによって、しっかりと右手に収まった。

『と、止めたあああああ!!覚醒した神童の新必殺技によってシュートの威力を下げ、キーパー三国のゴッドハンドXでしっかりとキャッチ!辛くも止めた前半とは違い、今度は完璧に止めてみせたあ!!』

「なっ?!フィリアのシュートが止められただど!?!」

「…………ツ!」

凄い…………ツ!前半俺と剣城がブロックした時も、完全には止めきれなかったのに……

!

それに、神童センパイのディフェンス技なんて初めて見た。

本来司令塔として指示するだけでなく、オフENS用にドリブル技やシュート技を使うのはよく見るけど、今回のようなシュートブロックは疎か、ディフェンス技なんて今までの試合で使った事無かったはずなのに……。

これも円堂監督のフォーメーションによる影響なのか？

「三国さん」

「ああ。神童よくやってくれた！おかげであの強力なシュートを止め切る事が出来た」

「ええ。ーーーですが、本番はこれからですよ」

そんな会話を挟みつつ、三国センパイからボールを受け取る神童センパイ。

「天馬！皆！行くぞ！反撃開始だ!!」

神童センパイの叫びで、俺達はオフENSに切り替える。

本来ならこの場面、カウンターが有効なところだけど、ブレイブニールは既に自陣の

方に戻りつつあった。

切り替えの早さもあるけど、ブレイブニールはフィリアがシュートを撃つ際少し後退する傾向がある。シュートが入っても、弾かれても、止められても……どんな状況にも対応出来る様に行動している為、カウンターの類なんかもあまり効果がない。

ドリブルで持ち込む神童センパイから錦センパイへとパスが回り、そのまま俺にボールが渡る。

前半最初の攻めに似ているけど、今回は違う。

他の一年の皆は、先程俺が伝えた神童センパイの指示通りに一定の距離を保って上がっている。

「(……オフENSEの動きが変わった……?しかも、この動きは……)」

「輝!」

俺は相手の動きを見て、走る輝の2、3歩前に目掛けてパスを出す。

それに一早く反応した輝がスピードを上げ、そのままダイレクトで上空に上げた。

「信助君!」

空高く上がったボール目掛けて、信助が跳躍する。

信助をマークしていた相手選手も追いかけるが、一早く跳躍した信助に追い付けるはずもなく、信助はヘディングでパスを出した。

「狩屋！」

「劍城君！」

「天馬！」

そのまま続いて、俺たちは相手の密集した陣地の中、一年生それぞれの得意な場所に目掛けてパスを出し続ける。

輝は瞬間的なダッシュ力から、本人よりも前気味にパスを出し、持ち前のキック力から力強いパスを。

信助はボールに対する反応の良さとジャンプ力から、主に空中メインにパスを。

狩屋はしなやかなボディバランスとボールキープ力から、少々アウトな位置のパスにも対応でき、ボールコントロールの末にパスを。

劍城は相手のディフェンスを切り抜ける状況判断と、ストライカーとしての鋭いパス

で相手の意表を突く。

皆が互いの事を理解しているからこそ回せる、俺たちだけのパス回しだ。

「これは、私たちの……？けど何かが——」

フィリアが困惑している中、俺たちは更に仕掛け続ける。

フィリア達の相手の反応外に出すパスとは違い、こちらのパスはあくまで対一の優位性を活かしたパス。

それは信助へのパスの空中域を主軸に、相手のディフェンス域の中で徐々に広げる。

中継を挟みながら広がるそのパスワークは、次第に相手の陣形をも大きく散らしていく。

「ツ!! 拙い! 皆、陣形を保って!!」

「もう遅いよ! 行け、剣城君!!」

「でえええええりやああああ!!」

俺たちの思惑に気付いたフィリアだったが、輝からのパスを確保した狩屋が、そのま

ま相手陣内の中央——その上空へとボールを上げる。

そのボール目掛けて剣城が飛び、前方へ一回転しつつ、踵を振り下ろし下へ撃ち落とした。

「「「必殺技タクティクス!!」

——だいはくはつおおはなび大爆発大花火ツツ!!!「「「

ドンツツツツツ!!!

蓄積されたエネルギーが地面に撃ち落とされた衝撃で、花火の如くエネルギーが爆発する。

その衝撃に、思惑に気付いて中央に駆け寄っていたフィリアは勿論のこと、技を掛けていた一年生ごと周囲にいた者は吹き飛ばされてしまう。

しかし、

『風穴……ドライブツツ!!』

爆発直後、俺は風穴ドライブで俺に向けられる衝撃を弾き、作られた風の空間を辿っ



てボールを確保する。

大爆発大火花で相手の陣形は崩れ、ボールを確保した俺はキーパーのジャンカルと一対一になる。

「フツ………来い!!」

「ツ、はああああああああ!!出てこい!魔神ペガサスアークツ!!」

俺は背中にオーラを集中させ、化身を呼び出す。

背中から形造るオーラは、凄まじい威圧感と雄叫びと共にその姿を現す。

「……魔神ペガサスアーク。」

これが、一度の進化を経てパワーアップした今の俺の化身!

「化身か………ツ。面白い!」

「まだだ!……アームドツ!!」

俺の化身を見て構えるジャンカル。

そんなジャンカルに対し、俺はもう一つ加える。

俺の掛け声に反応した魔神ペガサスアークは、その姿を光り輝くオーラに変え、俺の身体と一つになる。

身体、脚、腕、各部位に魔神ペガサスアークを模した武装を施し、俺自身の身体能力を何倍にも引き上げていく。

背中から翼を生やし、頭部への武装が完了した事で——化身アームドが完成した。

「何?!」

「化身を……纏った……?!」

俺の化身アームドに、ジャンカルだけでなくフィリアや他のブレイブニールの選手たちも驚いた様子だ。

それもそのはず。化身アームド自体、先の未来人との戦いにおいて俺たちも初めて知ったものだし、現状この世界で使えるのは雷門の化身使いと新雲学園の太陽だけのはずだ。

『——ゴッドウインドツ!!』

『……ツ、コロッセオガード!!』

化身アームドした状態で、俺自身の最も強い必殺シュートを放つ。

対するジャンカルも、瞬時に切り替えこの試合で初の必殺技を出す。

その名の通り、壮大にそびえ立つ壁にシュートを阻まれる。普通の状態でゴツドウィンドを撃ったとしても、あの壁を突破できるかはわからない。

ー！ー！けど。

「ぐ……ッ、ぐわああああああ!!」

ズガアアアッッ。

化身の力をも上乘せしたゴツドウィンドは、その壮大な壁を撃ち破り、ゴールに突き刺さった。

『ゴ……ゴオオオオオオオオオオ!!なんと！化身をその身に纏わせた松風天馬が、あの鉄壁の砦であるGKジャンカル・ジュラーノの必殺技を撃ち砕き、ゴールを決めたああああ!!雷門！初得点だああああ!!』

「ッ、やったああああああ!!」

「凄いや天馬ああ！」

「信助ええ！皆のお陰だよ!!」

化身アームドを解きつつ、あのブレイブニールから得点出来たことに心の底から叫ぶ俺は、近づいてきた信助と共に喜びを分かち合う。

3-1。

まだ1点しか取れていないけど、この1点は俺たちにとって、世界に対してとても意味のある、大きな1点だった。

## 第五話 未知の力、そして決着

松風天馬の得点により、勢い付いた雷門イレブン。

前半は翻弄されてばかりであったブレイブニールの動きにも、後半中盤に差し掛かって徐々に対応しつつあった。

『アインザッツ！』

雷門のデイフェンスラインまで攻めていたブレイブニールであったが、MFにボールが渡ったところで、雷門の司令塔である神童の新必殺技でボールを奪われてしまう。

「しまった……ッ」

「皆上がれ！もう一点取るぞ！」

ボールを奪ってすぐ、前線の狩屋へとパスを出す。

ブレイブニールもすぐに切り替えてデイフェンスに戻る。MFとFWを中心とした

中盤固めのディフェンス……これまでと変わらない陣形だ。

——しかし。

「『必殺技タクティクス！』」

だいはくはつおおはなび

「——大爆発大花火ツ!!」

神童から狩屋へと渡ったパスは、影山、剣城へと渡り、前線にいる一年生の間でパスワークを作り出していく。

このパスワークにブレイブニールも対応しようとするが、一対一の優位性を活かしたパスに対応し切れず、先程と同様に徐々にその陣形は広がりつつある。

幾度かのパスを経て、陣形の広がりを確認した剣城は、陣形の中央——その上空へと最後のパスを出す。

「行け、影山！」

松風さん

「ツ、皆！8番を抑えて！彼がこのタクティクスの要です！」

「『了解!!』」

先程の必殺タクティクスを体感し、ボールの確保に天馬の力が必要だと判断したフィリアは、そのように指示を出す。

それにより、天馬に3人のマークが付き、身動きを完全に封じていた。

一方指示を出したフィリア自身は、空中に上げたボールを確保しようと、跳躍した影山を追っていた。

影山のキック力も剣城に負けず劣らずに強いが、フィリアはそれを更に超えている。このまま撃ち下ろしのボールをブロックしたとしても、地面への衝撃に比べれば捌く事は可能だろう。

「(ーーー最悪これで防げなかったとしても、松風さんを抑えてる今、あちらもこの技の衝撃に対応出来る選手はいないはず。後はジュラーノがボールを確保してくれば、逆にカウンターでこちらが優位になる!) もらったわ!」

「……ッ、うっ……ぎいいいいいい!!!」

跳躍がボールに届く手前。

影山はフィールドの状況を瞬時に把握し、ボールに自らの必殺技を掛ける。

ボールから発せられるオーラが、影山ごと球状の空間に包み込み、空間の流れに乗っ

た影山はそのままシュートを放った。

『エクステンドゾーン……V2ツ!!』

「なっ……!?!」

大爆発大花火のパスワードによって蓄積されたエネルギーを加えて、高度から必殺シュートを放つ。

距離はあるが、それでも十分過ぎるほどの威力を秘めたシュートは、ジャンカルの警戒心を更に強めた。

『コロッセオ………ツ!?!』

天馬のシュートで使った必殺技を再び発動させようとするジャンカル。

しかしそれは、必殺シュートの軌道がサイドにそれたことで、集中力を途切れさせてしまう。

一瞬の硬直。

それが一年生達の狙いだった。



「ボールがサイドに……ッ!？」

「いつけえええええ！剣城君!!」

「ああ!!」

サイドにそれたエクステンドゾーンの行く先には、サイドから上がっていた剣城の姿があつた。

大爆発大花火のパスワークによってスペースが空いていた事。

そして技の衝撃に警戒していたブレイブニールの選手達の硬直が、最後にパスを出した剣城をここまで上がらせていた。

『……デスドロップG3ッ!!』

「ッ！チッ……ッ!」

通常のデスドロップの比ではない威力の必殺シュートが、ゴールの角隅に向かつて放たれる。

一瞬の硬直で僅かに反応が遅れた為、ジャンカルには技を繰り出す暇もなかったが、

その強靱なバネでボールに喰らいつき、両手で掴む事に成功する。

しかし、体勢が不十分であり、幾重にも重ねてきた威力の必殺シュートに、流石のジャンカルも弾かれてしまった。

『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!! 3-2! 雷門、一点差に追い上げたあ!! 雷門の新必殺タクテイクスを警戒していたブレイブニールでしたが、必殺タクテイクスをそのままシュートに繋げた影山の機転! 更に意表を突く剣城のシュートチェイン! またしても雷門一年生のコンビネーションを魅せた素晴らしいプレーでした!』

「やったあ! あと一点!」

「いいぞ! 剣城、影山!」

3-2。

連続得点を決めた事で、ベンチも含め歓喜する雷門。

残り時間もあと僅かだが、このまま同点、逆転も出来る。

天馬達は、そんな手応えを感じていた。

l Side out.



l Side. フイディオ

凄い……これがマモルが率いる、新しい雷門の選手達か。

……ここ近年、日本の少年サッカーは管理サッカーなどと呼ばれる、選手達にとって不自由なサッカーの影響でそこまで脅威を感じなかつた。

個人の成長を阻害する、管理化されたサッカーシステム。

10年前、マモル達が世界一を取れたのは、試合毎に成長する脅威の成長スピードがあつたからこそだ。

その日本の一番の武器とも言える力を抑制しては、世界的に見ても脅威など感じるはずもない。

「しかし、現にそれを実行してみせているのが、この新しい雷門イレブン……」

俺もその昔、とある少年との不思議な出来事によって、当時のマモル達の雷門イレブンと共に試合をした事があるからこそわかる。彼らは、マモルがいう雷門魂を真に受け継いだ選手達だ。

この試合もその脅威の成長スピードで、前半全く歯が立たなかったファイリア達を徐々に追い詰めている。

「……さて、ファイリア。君もこれで分かっただろう。彼らの強さを。この力にどう応えるかは、君たち次第だ」

俺の目線先に立つファイリアの表情は、とても晴れたものとなっていた。

ローファイリアはどうとう、見つける事が出来たのだろうか。

彼女の力は、師弟関係にある俺から見ても本物だ。

決して才能に溢れていたわけでもなかったが、強くありたいという気持ちは誰よりも持っていた。その純粋な想いに俺は惹かれ、師弟関係となったのだから。

人一倍の努力でサッカーにうち込み、強豪チームのキャプテンとして信頼されるまでに成長した。

しかし、そんな彼女にも欠落しているものがある。

本国でも圧倒的な力で勝ち進んできた彼女にとって未だ出会うことのなかった、自らの力を全て出し切り、互いに成長し合える唯一無二の存在ローというものを。

「さあ、雷門イレブン。そして……松風天馬君。ここからのフィリアは更に手強いぞ」

「……かつて俺が対峙した、最高のライバル円堂守のように。」

l Side out. フィデオ

◇◇◇

l Side. 松風天馬

……あと1点取れば、追いつける。

輝と剣城が2点目を取ったことで、再びブレイブニールのボールから試合が再開されようとしていた。

今流れは、完全に雷門こっちにある。

もう1度ボールを奪って、大爆発大花火に繋げる事が出来れば、さっきの輝達のように応用を効かせ、3点目を取る事もそう難しい事ではないはずだ。

試合が再開され、もう1人のFWからフィリアにボールが渡る。

俺達は再び、相手のパワークに対応すべく、ディフェンスを固めようとする……が。

「……まさか私達が2点も取られるなんてね。先程までの考えを、改めなければなら  
ないわ」

ゾク……ツ。

フィリアがそう口にした瞬間、それまでの場の空気が一気に変わった。

力強い圧のようなものを感じ、フィリアが一步步近づくと毎に、その重圧は重くのし掛か  
る。

フィリアは……笑っていた。

まるで何か新しいモノを見つけた時の無邪気な子供のように、側から見ても楽しそう  
に思える。しかし、それが今は逆に怖い。

そして……。

「何だ……あれは……？」

隣にいる剣城がそう口にする。

そう、フィリアが口を開いた直後。

フィリアの周りに青白いオーラのようなものが、フィリアの身体全体に行き渡り、纏わりついている。

化身のオーラとも違う、不思議な力強さを感じるオーラだ。それでいて、どこか神秘的な輝きを放っている。

「ツ、皆！気を引き締めろ！……ここは何としてもボールをうば………ツ!!」

「な……ツ!?!」

「速い………ツ」

神童センパイが皆に声を掛ける中、フィリアは先程とは比べものにならないスピードで、俺と剣城の間を抜き去っていった。

「く………ツ！」

「止める!!」

『ハンターズネット……V2!』

正面に立つ輝、サイドからスライディングを仕掛ける信助、そして輝の後ろに回り必殺技を仕掛ける狩屋。

そんな3人に対し、信助のスライディングをジャンプして躲し、着地と同時に体を反転させて輝も抜き去るフィリア。

狩屋のハンターズネットは、フィリアの放つ強力なシュートによって、ネットそのものをこじ開けてしまう。

ボールはそのまま上空に上がり、ネットの穴から抜けたフィリアも跳躍してボールを空中で確保する。

「バカな！」

「あの3人がこんな簡単に……ッ!？」

「くそっ！」

上空に上がったフィリアは、体を回転させ脚を振り下ろし、そのまま真下へとシュートを放つ。

先程の大爆発大花火の撃ち下ろしのように、強力なシュートで起こった砂煙は、残りのデイフェンス陣の視界を奪う事となった。



フィリアは地面に着地し、あの砂煙の中を、まるで一人だけ視界が見えてるかのよう  
にボールを確保し、ゴール前に姿を現した。

「さっきの意趣返しをさせてもらったわ」

「ッ、来い！」

三国センパイと一対一になる。

フィリアはボールに回転をかけ、回転と共に胸元まで上がるボールに対し、ごく自然  
体のまま目を閉じる。

ボールが回転した事で、フィリアの周囲の大地から根を張るように、緑色のオーラが  
ボールに集約される。

オーラが全て集約されると、フィリアはボールを上空に蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされたボールは上空で放電するかのようになり、集めたオーラを一気に放出さ  
せ、今度は上空に根を張るように広がる。

いつの間にか跳躍していたフィリアは、その放電の中心にあるボールに蹴りを入れ、  
シュートを放った。

『イグドラシルスファイア!!』

広範囲にも及ぶオーラのエネルギーと共に、フィリアの強力なシュートがゴールに向かう。

先程のオーデインソード以上の威力なのに対し、俺達は誰一人フォローに行けないこの現状……拙いッ。

「三国センパイ!!」

『うおおおおおお!!絶ッ!ゴッドハンドX!!』

三国センパイはゴッドハンドXでフィリアのシュートを受け止めるが、その圧倒的な力に堪える事もできず、ゴッドハンドXは粉碎されてしまった。

『ゴ、ゴオオオオオオオオ!!何という事だ、フィリア・サンデューロ!試合再開と同時に単身雷門陣営に攻め込み、一人でゴールを奪ってしまったあ!』

「そんなバカな!」

「圧倒的過ぎる……ッ」

フィリアの急激なパワーアップ……やはりそれは、あの身体に纏う不思議なオーラの力。

フィリアの必殺シュートも凄まじかったけど、その前のオフエンス力は前半には無かった動きだ。

多分、今のフィリアに、チームメイトですら動きについていくのは困難のはず。それほどに圧倒的だった。

自陣に戻ろうとするフィリアと、視線が合う。俺の目の前まで来たところで、フィリアは立ち止まった。

「……凄いよ、フィリア。まだこんな力があつたなんて」

「私達も驚かされたわ。貴方のあのカーブそして、貴方達のサッカーに。なら、それに応えなければ失礼に値するでしょ?」

俺の言葉に、楽しみに口にするフィリア。

そして、フィリアが自陣のポジションに付き、雷門ボールから試合が再開される。

「天馬」

「……わかってる」

残り時間を考えれば、4-2のこの状況はかなり厳しい。

大爆発大花火は、相手の陣形の広がりを狙う為、かなりの時間を要する必殺タクティクスだ。仕掛けたとしても、あと一回いけるかどうか……それでは同点にも追い付けない。

でも、それでも、まだ諦めるわけにはいかない。

フィリアが俺達のプレーに伝えてくれたのであれば、俺達も、あのフィリアのプレーに答えなくてはならない。

それに……。

剣城から俺にボールが渡り、試合再開。

相手はこれまでと同様に、中盤固めの守りに入ってるけど、微妙に違う。

今までのチームワークを活かした動きではなく、僅かではあるけど、フィリアを中心とした動きに変わってる。

「狩屋……ッ!?!」

こちらのオフエンス陣（年組）が上がったところで、俺は狩屋にパスを出そうとするが、狩屋に二人のマークが付いていることで踏み止まる。

狩屋だけじゃない。

劍城、輝にも二人のマークが付き、信助に至っては三人も付いている……ッ。

この必殺タクティクス上の性質上、このくらいなら問題なくパスを出せる筈なのに、今はそのパスコースが完全に塞がれてる！

フィリアとジャンカル以外で行なう、この陣形だからこそ出来たパス封じ。

仮にここで神童センパイ達が上がって来ても、この陣形の中ではまともなパスも出せないはずだ。

「どう？…これが私達なりの答えよ」

俺の前に立ち、対峙するフィリア。

……先程のプレーから、フィリアのワンマンプレーでチームワークが崩れるかと思っていたけど、むしろ逆。

フィリアを中心に動くことで、他の選手達の動きもより良くなっている。この動き

が、このチームの本質なのかもしれない。

「さあ、完全に孤立したわよ。ここからどう攻めるのかしら？」

「フィリア……確かに厳しい状況だよ。今の俺に、本気になったフィリアを抜けるかはわからない。残り時間も少ないし、追い付けるかもわからない」

でも、と俺は更に続ける。

「厳しい状況……だけど、俺は諦めない！今までだってそうだった！諦めなければ道は開けた……諦めなければ、なんとかなるんだッ！」

俺は背中からオーラを出しつつ、そう叫ぶ。

今俺が出せる全力を、フィリアにぶつけるんだッ！

「絶対抜いてみせる！……魔神ベガスアークッ！アームドッ!!」

「……ッ！イイわッ、来て！松風さん!!」

俺は魔神ペガサスアークを、そのまま鎧として身体に包み込み、化身アームドを発動させる。

対するフィリアも、先程から纏っている青白いオーラの圧を高め、迫って来る。

右、左、時にフェイントを織り交ぜ、体を反転させ抜こうにも、行く先々に回り込まれる。

『……そよ風ステップ…:S!』

「甘いわよッ！」

そよ風ステップで抜き去る直前、フィリアはバックステップし風の軌道の流れから逃れ、ボールをカットしようとして試みる……が、俺はその脚をジャンプして躲し、ボールの奪取を防ぐ。

しかし動作が大きかった為、着地と同時に再びフィリアに回り込まれ、再び対峙する形に。

「やるわね、松風さん！」

「ッ、フィリアこそ！」

得意のドリブル技術、必殺技、化身アームド……色々と試してるけど、一向に抜けない。フィリアのサッカーの技術は、あらゆる面で俺を超えている。

……正直、悔しい。

ドリブルだけなら、誰にも負けない自信があった。ドリブルだけなら、世界に通用するだけの力を身につけたつもりだった。

本当に悔しい……けど、それ以上に。

「……楽しい」

……小さい声だったけど、何故か俺にはハッキリと聞こえた。

……いや、聞こえた理由なんて分かり切ってる。

だってそれは、俺も感じていたことだから……。

『はあああああああッ!!』

ドンッ!!



何度かの交錯の後一旦距離が離れた俺達は、互いに飛び込み、ボールに全力の蹴りを入れた。

互いに全力で蹴り合う衝撃がフィールド全体に響き渡る。

力は拮抗しているー！ー訳ではない。

僅かだけど、俺が押されつつある。

幾ら化身アームドしているとはいえ、フィリアも何かしらの強化をしている以上、キック力の優位はフィリアにある。

それでも、俺はー！ー！。

「ー！ー！、はあああああああッ!!」

「ッ!?!」

バアンツ。

俺が更に力を加えた事で保っていた力の均衡が崩れ、ボールが上空に弾かれてしま  
う。

その瞬間ー！ー。

ピーツピー、ピーー！

突然のホイッスル、ピーー！試合終了を告げる合図が、フィールド全体に響き渡る。

つ、つまり俺達雷門の、敗北だ。

## 第六話 それぞれの思惑

l Side. ???

ピーツピー、ピーー！

……松風天馬とフィリア・サンディーロの衝突。

新しい必殺タクティクスで突破口を見出せた雷門だったけど、フィリア・サンディーロのあの力によって、戦況は更に覆った。

……まさか、こんなところであの力を目にするなんて。

結果的に、更に動きの良くなったブレイブニールに必殺タクティクスを封じられ、相手陣内に孤立する松風天馬。

フィリア・サンディーロと一対一となり、化身アームドを発動させながら攻める。

『……諦めなければ、なんとかなるんだッ！』

なんとかなる……とてもそんな状況じゃないのは、見てる観客からしても明らか。  
——なのにな。

「……………凄いな」

思わず、私はそう呟いた。

松風天馬の得意とするドリブルも、必殺技も、それらを化身アームドした状態でありながらも、フィリア・サンデュークを抜くことは出来ない。

ただ、ボールを取られてもいない。

信じ難い事だけど、彼はこの攻防の中で、秒刻みに進化している。あのどうしようもないフィリア・サンデュークの力を前に、少しずつ対応しつつある。

器用——試合前の私は、彼にそのような評価をした。

けど、違う。器用なんて、これはそんな低次元の話じゃない。

——異質。

そう、サッカープレイヤーとして、彼はあまりにも異質だ。

——お前となんて、一緒にプレーできる訳ないだろ。

「……異質なんだよ、お前。お前のサッカーに付いていくなんて、無理に決まってるだろ。」

「……」

試合は二人の蹴りの衝撃により、膠着状態にあつた。

力は拮抗している……」

側からはそう見えるけど、未だ松風天馬は届いていない。

僅かではあるけど、フィリア・サンディーロの方が力は上だ。

このままでは負ける。そう判断した時……」

「……ッ、はあああああああッ!!」

「ッ!?!」

「バアンツ。」

松風天馬の蹴りの力が急に高まり、ボールに掛かる力の均衡が崩れる。

ボールは弾かれ、二人のはるか上空まで上がった瞬間、試合は終了。

4-2。

後半押ししていたように見えただけ、結果的には敗北。

……せめて後10分、時間があれば、今の松風天馬なら追い付くことが出来たのではないか？

今の彼を見てるとそう感じるけど、どの道たられればの話だ。

スタジアムは両チームの健闘を称え、拍手で溢れ返っている。

しかし私はそんな中、松風天馬というサッカープレイヤーに視線を外せないでいた。

彼ならば、きっと……。

l S i d e o u t .  
???

◇◇◇

l S i d e . 松風天馬

「はあっ、はあっ、はあっ……っ」

——終わった。

新必殺タクティクス、そして二度の化身アームド。

完全に息が上がった俺は、その場で膝に手を置き、整えるように息を吐き出す。

412。

結果、そして内容を見ても、明らかに完敗だ。俺達のサッカーはまだ、世界のトッププレイヤーには通用しない。

悔しさ……は勿論ある。

けどそれ以上に、楽しかった。世界のトップクラスのサッカーというのを、肌で感じる事が出来た。

今はまだまだだけど、いずれは——。

「お疲れ様、松風さん。とても良い試合だったわ」

「フィリア……ありがとう。俺達もその、楽しかったです」

その場で息を整える俺に近づくフィリア……その後ろには、GKのジャンカルもいた。

フィリアは手を差し出して来る。

俺はその手を取りつつそう告げると、フィリアの顔は真っ赤に染まった。

「や、やっぱり聞こえてたのね……。ごめんさい、プレー中に」

「あ、いや……。つ、俺もあの時はその、とても充実してて……全く、同じ事考えてました」

「充実……。そうね。私もとても充実していたわ。最近、こんな試合をした記憶が無かったから、余計に……。ね」

フィリアは微笑みながら、そう語る。

「ねえ、松風さん。貴方の事、"テンマ"って呼んでも良いかしら？ 貴方も、試合の時みたいにフランクに接してもらって大丈夫よ？」

「え？ あ、はい！ もちろん！」

ふふつ、とこれまた楽しそうにそう口にする。

その後ろでは、ジャンカルがとても驚いた様子でいた事に気付く。

……。その後、何故か鋭い視線をこちらに向けていた事にも。



「じゃあーテンマ。また試合しましょうね。今度は、もっと大きな舞台上で」  
「はい…あ、いやーうん、やろう！今度は絶対、負けないから！」

俺とフィリアは、改めて握手を交わす。

それと同時に、スタジアム全体が拍手で溢れ返る。

こうして、俺達の初めての海外チームとの試合は、敗北という形で終わりを告げた。

ただー俺とフィリアは、この時の約束の機会が近いうちに訪れる事を、今はまだ知らなかった。

l Side out. 松風天馬

◇◇◇

l Side. フィリア・サンディーロ

「えらく気に入った様だな。あの松風天馬とかいう小さなキャプテンの事を」

日本のチーム、雷門との試合が終わり、宿泊予定のホテルに向かうバスの中、試合の余韻に浸っていた私に、隣に座るジャンカルがするように口にする。

「気に入った……そうね。彼は強いわ。サッカーの技術云々の前に、心の在り方が。あの純粋なサッカーへの強い想いの気持ち、彼をあそこまで強くさせた」

試合終了後の彼は、試合前の彼よりも圧倒的に違う。プライベート<sup>私</sup>ニール<sup>達</sup>という強い力とぶつかった事で、彼をあそこまで成長させた。

そしてそれは、私も同じニール。

「フィデイオさんがよく言ってたじゃない。本当に強くなりたいのであれば、自らの力を全て出し切り、互いに成長し合える唯一無二の存在ニール<sup>ライバル</sup>好敵手<sup>ライバル</sup>と出会う事だつて」

「……フィリアにとつての好敵手<sup>ライバル</sup>が、彼だと言うのか？」

「そうね……。今日の試合は、お互いが成長し合えた場だった。テンマがどう思ってるかはわからないけど、私にとつての好敵手<sup>ライバル</sup>は正に彼ね」

もしかしたら、ファイオさんの狙いはそこだったのかも知れない。

正直に言えば、本国でプレーしていた時の私達は、何処か停滞傾向にあった。

各大会での優勝……圧倒的というわけではなかったし、強敵ともいえるチームは他にも存在する。

ただ、その中でも選手個人で見ると、強敵といえるのは本当に片手で数える程だ。チーム全体が高いレベルである事は、実はそうそう無い。

そんな中で決まった、F F I 優勝国である日本で一番強いチームとの試合。

今回の相手は、チーム全体が高い水準のレベルにあり、その中でも世界で通用する輝きを持つ選手が何人かいた。

そして、その中でもテンマは、一層の輝きを見せていた。今はまだ発展途上でも、次に会った時は……。

「それに、今日個人シュートで私達のゴールを奪ったのは、紛れもなく彼じゃない。直に彼のシュートを目の当たりにした貴方なら、分かってくれると思っていたのだけど」

「……………分かりたくもないな」

不機嫌そうにそう呟いた彼は、拗ねるように私から視線を外し窓の景色を眺めた。

……試合が終わってからというもの、ずっとこんな感じだ。  
一体、何故ずっと不機嫌でいるのか。

「……まあ、いつか」

私も目を閉じつつ、そのように自己完結させる。

——明日には、イタリヤに帰国する。

今度また試合する時の為に、私ももっと強くなりたい。

サッカーを始めてからというもの、こんな気持ちは初めて……だからこそ——楽しくもある。

ホテルまでの道のり。

私は初めての、不思議な感情に心地良さを感じつつ、そのまま眠りについた。

l Side out. フィリア・サンデーロ



—Side. 松風天馬

「霧野、劍城をマークだ！車田さんは倉間をお願いします！天馬は俺が！」

「ああ、わかった！」

「頼んだぞ！」

「行きますよ！神童センパイ！」

フィリア達との試合から、早二週間。

今日も俺達雷門は、練習に明け暮れている。

あの試合で、色々と課題が見つかった俺達の練習は、少しずつ変化が見られた。  
今の神童センパイの指示もそう。

以前はどちらかという、司令塔としてオフENSに重視した指示だったのに対し、この二週間はディフェンス面にも指示の傾向が見られる。

神童センパイ自身もディフェンス技を習得した事で、雷門の守りは更に強固なモノとなった。

その証拠と言つてはアレだけど、四日前に行なつた新雲学園との練習試合では、太陽を中心としたあのオフENS相手に、4-1と得点を1点に抑え俺達雷門が勝利した。

そして、俺自身も——。

『アインザッツ！』

対峙する神童センパイが、両手で空を切るように払いクロスさせ、奏でる音を聴くように目を閉じる。

俺はその目を閉じたタイミングで、ボールを軽く蹴り空中に上げる。

そして神童センパイが目を開け、ボールをカットしようと接近して来るタイミングでスピードを上げ、ループするように落ちてきたボールを確保して抜き去った。

「なっ……！」

「通さないよ！天馬君！」

神童センパイを抜き、狩屋が即座にフォロウに入る……けど。

必殺技に入られる前に、目線と脚の動きで左右に揺さ振りを掛ける。

フェイントも挟みつつ、狩屋の脚が大きく開いた所を股抜きで抜き去った。

「やつ……ばー！」

『ゴッド……ウインド!!』

『はあっ……うーっ……ぶっ 飛びパンチッ!!』

狩屋を退け、キーパーの信助と一対一となる。

俺のゴッドウインドに対し、信助はぶっ飛びパンチで対応する。

しかし、神風の勢いにサイドからのパンチングでは捌く事が出来ず、ボールはそのままゴールに突き刺さった。

「……やられたな」

「……スピードも相手を抜くドリブル技術も、あの試合からまた格段に上手くなったな」

俺が倒れている信助に手を貸していると、神童センパイと剣城がそんな事を口にする。

「ホント凄いや、天馬！この前の新雲学園との練習試合もドリブル技使わないで、相手を何人も抜いてたしさ！スピードもまた速くなったよね！」

「そ、そんな事ないよっ！俺なんてまだまださ。……今のままじゃ、まだフィリアを抜く事は出来ないし、もっと……もっとと上手くならないと……！」

……フィリアと一対一になった、あの最後の攻防。

あの時のどんどんスピードが増していく感覚……正直今の俺は、あの時のスピードには全然追いついていない。

その上、俺のドリブル技術がまだ未熟だったから、あの時はスピードを活かしきれなかった。

あの加速していくスピード、そしてそれを活かせる技術があれば、フィリアを抜く為の……新しい必殺技に繋がるかもしれない。

そう思っこの二週間は、極力ドリブル技を使わずに練習してきたけど、なかなか上



手くいかない。

「僕も負けてられないなあ……。あのジャンカルつてゴールキーパーの動きは、きつと僕にも応用が効くと思うんだよね。あの体の使い方、足腰のバネの活かし方……。あの試合で、どれも凄く勉強になった気がするよ」

「俺もあの試合のフィリアの動きは、同じFWとして参考になる部分が多かった。今まではパワー寄りに作り上げた必殺技が多かったから……。一度基本に立ち返ってみるのもいいかもしれない」

信助も剣城も、あの試合で学んだ事を活かそうと色々と考えている。

もちろん、信助や剣城だけじゃない。

他の皆も、それぞれの思惑でこの二週間の練習を行なっているのは、側から見てもわかる。

——雷門は、まだまだ強くなる。

フィリア……。俺、頑張るよ。

この凄いチームのキャプテンとして、いつかきつと、フィリアのチームともう一度サツカーが出来るように。

あの時の続きが、出来るようにー。

「さあ、皆！もう一本いきましよう!!」

ーもつともつと、強く。

## 【第2章】 誕生！新生イナズマジャパン！！

### 第七話 出会いと始まり

「ほら、天馬——！急がないと遅れちゃうわよ——！」

「分かってるって、秋姉——！」

朝方の木枯らし荘に、慌ただしい音が響き渡る。

声の主は松風天馬と、彼が暮らしている木枯らし荘の管理人、木野秋だ。

「それじゃあ秋姉！行ってきまーす！」

「いつてらっしやーい！円堂君によろしくね〜」

木野秋に見送られ、自慢のスピードで飛び出すように木枯らし荘を出た天馬。彼が向かう先は、雷門中サッカー棟。

しかし今日は授業日でも、サッカー部の練習でもない。

「……それは、昨日の事だった。いつも通りサッカー部の練習を終えて帰宅した天馬に、円堂守から突然連絡が入ったのだ。」

『……明日の9時に、雷門中に来てくれ』

用件はそれだけであり、何の為に雷門中に行くのかも、天馬は知らされていなかった。ただ、その日はサッカー部の練習も無かった為、天馬は特に断る理由もなく承諾した。つまり、今雷門に向かっているのは、円堂守から呼び出されたからであるが……。

「拙い……このままじゃ完全に遅刻だあああ!!」

よりもよって、そんな日に寝坊した天馬だった。

木枯らし荘を出たのが、8時45分。

木枯らし荘から雷門中までそこまで距離はないが、天馬のスピードでも15分で着けるかは、ギリギリといったところだろう。

スピードに乗って加速する天馬は住宅街を抜け、目の前には河川敷が見えてくる。

後は河川敷に出た道を右に曲がり、駅構内を抜けてまっすぐ行けば、雷門中に到着する。まだ距離はあるが、駅構内を抜ける事を考慮しても、この調子でいけば決して間に合わない距離ではない。

天馬は日頃鍛えてる走力と体力で、一気にスピードを上げようと踏み込む。――

「……ッ!? わあッ!!」

「きゃっ……!!」

スピードを上げて右に曲がろうとしたところで、誰かとぶつかってしまった。

咄嗟に気付いきブレーキを掛けたものの、あのスピードが急に止まるわけもなく、半ば突っ込む形で衝突してしまった。

しかもぶつかった相手というのが、どうやら女の子のようだった。

「す、すみませんっ、大丈夫ですか……ッ!?」

「いっ……たああ……。もう、危ないじゃない……ッ!?」

即座に起き上がり、相手への謝罪と安否を確認しようとする天馬だったが、相手の顔

を見た瞬間思わず硬直した。

深い水色の髪色。

鋭い目付きに、紫色の瞳。

後ろに流してる少し長めの髪と、所々癖つ毛の入った髪型は違うが、まるで——。

「(——ベータ……?!……いや、でも髪型も違うし、なんか紅いメツシユみたいなのが入ってる……。他人の空似……?)」

——ベータ。

嘗て天馬達が未来人との戦いにおいて、未来人との実力の差を思い知り、最も苦戦した相手の一人だった選手だ。

同時に、円堂守やその祖父の父の父を封印し、天馬達が時空最強イレブンの力を集める旅に出る事となったきっかけの人物でもある。それ故に、天馬の中で印象の強い未来人だったとも言える。

最終的にはエルドラドという一組織として仲間になり、共にラグナロクを戦った選手  
の一人だが、ベータ本人は200年後の未来人だ。

目の前の女の子は確かに似ているが、似ているだけでベータ本人ではない。

天馬はそう判断し、目の前で倒れてる女の子に手を差し出す。

しかし、同時にその女の子も、天馬を見て驚きの表情を浮かべていた。

天馬が手を差し出してきた為、その手を取り起き上がるが、それでもまだ天馬の顔をずっと見ていた。

「えつと……本当にすみません。怪我とか大丈夫ですか？」

「え、ええ……大丈夫……。ねえ、貴方もしかして、雷門中の松風天馬？」

「え？あ、はい、そうですけど……」

「やっぱり！良かったあ……これで、一安心ね！」

「……………」

女の子の言動に、疑問符を浮かべる天馬。

「あの……なんで俺の名前を？」

「だって貴方、この前の親善試合でイタリアのチームと試合したでしょ？あの時私も見てたからね……一サッカープレイヤーとして、貴方にとっても興味があったし」

「へえ……え!? ってことは、君もサッカーやってるの!？」

「もちろん！こう見えて結構上手いよ、私」

見た目通りなら確かに凄そう——そんな思考がチラつく天馬だった。

「私の名前は」紅月<sup>あかつき</sup>美羽<sup>みう</sup>。ポジションはMFだけど、基本オールラウンドに動き回るからそういった意味ではリベロの方が適任かな？今日は貴方のところの監督さんに呼ばれて雷門中に行く予定なんだけど、この辺りあまり来ないから、道に迷っちゃったのよね……。だから貴方に会えて丁度良かったって感じ♪」

「君も円堂監督に呼ばれてるの!? だったら一緒に——」

そこまで口にして、ようやく気付いた天馬。

紅月美羽という女の子と出会い、色々あって、現在——8時58分。

つまり、約束の時刻まで残り2分。

完全に遅刻だ。

「やばい、後2分しかないよ！紅月さんも早く行こう!!」

「あはは！私の事は美羽でいいよ、天馬♪」



そのような軽い口で話しながらも、再び走り出した天馬のスピードに付いていく紅月美羽。

道端で衝突というハプニングから不思議な女の子と出会った天馬は、一刻も早く雷門中に辿り着くべく、その女の子を引き連れて駆け走った。

◇◇◇

l Side. 松風天馬

色々とおったけど、何とか雷門中に辿り着いた俺は、集合場所であるサッカー棟に向かっていた。

来る途中で出会った、紅月美羽という女の子。

最初見た時はあのベータに似ていると驚いたけど……まさか、美羽まで円堂監督に呼ばれているなんて。

一体円堂監督は、なんで俺達を呼んだんだらうか？他にも、呼ばれてる人がいるのだろうか？

疑問は尽きないけど……。

俺の後ろを走る美羽と共に、サッカー棟に入る。

サロンには誰もいないけど、何だかスタジアムの方が騒がしい。

10人……? いや、20人以上はいるみたいだ。

「すみません!遅くなりました……た……ッ!?!」

スタジアムへの扉を開いた俺が目にしたのは、錚々たる顔ぶれの集まりだった。

白恋中の雪村さん、木戸川清修の貴志部さん、聖堂山中の黒裂さんまで……ッ!

凄い……!ホーリーロード本戦で戦った各チームの主力選手が殆ど揃ってる!

この集まりは一体……

「遅いぞ、天馬」

声のした方に視線を移動させると、そこには神童センパイや他の雷門のメンバーが集まっていた。

といつても全員ではなく、いるのは、神童センパイ、三国センパイ、錦センパイ、霧野センパイ、剣城、狩屋、そして信助の7名だけだ。

すみません、と口にしつつも、俺は皆のところへ近寄った。

「やっぱり天馬も呼ばれてたんだね！時間過ぎてたけど何かあったの？」

「いや、今日という日に限って寝坊しちゃって……」

「……へえ、天馬が寝坊なんて珍しいね」

別の声……しかもこの声は……。

「太陽！久しぶり！太陽も呼ばれてたんだね！」

「久しぶりだね、天馬。先日の試合振り……かな？それにしても、今日は凄い面々が集まってるね。今年のホーリーロードで主力だった選手ばかりだ」

「……だが、よく見ると知らない人物も紛れ込んでいる。ここに集まっているという事は全員サッカープレイヤーなんだろうが、集まっているレベルから考えると、どうにも謎が多いな」

「白竜！」

「フツ……やはり来ていたか」

アンリミテッドシャイニングの白竜。

元フィフスセクターのシードで剣城の旧友であり、互いが認めるライバルだ。

そんな白竜が口にするように、確かにこの凄い面々の中にも知らない顔がいる。

一人は隅の方で小さくなつて怯えてる、あの女の子。

もう一人は壁に寄り掛かり、腕を組んで目を閉じてる、ちよつと近寄り難い男。

白竜の言う通り、集まっているレベルから考えると、あの二人のデータが無いのはおかしい。

実力が高いなら何処かで聞いた事があるはずだし、ホーリーロードに出ているなら尚更だ。

つまりあの二人はホーリーロードに出ておらず、この場にいる選手と同等以上の力を秘めた人達、なんだろうか？

……あ、そうだ。知らないと言えば――。

「そうだ、皆に紹介するよ！この子は紅月美羽！この子もサッカープレイヤーで、ポジションはMF！美羽も円堂監督に呼ばれたらしいんだけど、来る途中で偶然出会って、それで一緒にここまで来たんだ」

俺は後ろにいた美羽を皆の前まで連れつつ、そのように紹介する。  
……しかし。

「……………紅月、美羽。よろしくお願いしまーす」

あ、あれ…………？

俺が雷門の皆や太陽達に美羽の事を紹介すると、美羽は先程の明るい雰囲気から一転、棒読みのような言葉遣いで淡々と、皆に挨拶をした。

「態度悪いな…………？」

「君はどここの中学なんだ？」

「……それを貴方に教える必要が、何処にあるんでしょうか？」

空気が、凍った。

神童センパイの質問に対し、冷たく、鋭い目付きでそう告げる美羽。  
その鋭い視線に、流石の神童センパイも顔を引きつらせていた。

「ちよ……ちよつと美羽、こつち！」

流石にこれは拙いと思い、美羽を連れて皆から離れる。

「……えつと、美羽？俺達何か気に触るような事でもしたかな？」

皆と少し離れた場所で、そのように問う。

急が変わった美羽の態度。

……もしかしたら一緒に来た美羽を放っておいて、皆と話していたから、気に障ったのかもしれない。

そう思った俺だったけど、美羽は先程の冷たい雰囲気からまた一転し、俺と一緒に来た時のあの明るい雰囲気に戻っていた。

「ん……う？別にそんな事ないよ？」

「そ、そう……。でもさっきのは流石に失礼だよ。ほら、あの神童センパイって人は俺や美羽の一個上の人なんだからさ」

そう、来る時に少し話して聞いたけど、美羽も俺と同じ年齢らしい。

つまり美羽にとつても、神童センパイは年上つて事になるんだけどー。

「だから、何？」

「何つて、その……」

「年上だろうと何だろうと、私にとつては全て同じだよ。ーそれに私、あの人の事は特に好きになれないかな。私のスタイルに、なんか合わなさそうでヤダ」

「好きになれないって……神童センパイはー」

「……ごめんね？天馬。しばらく一人にして」

……作り笑い。

側から見てもわかる、あからさまな表情を浮かべた美羽は、そう口にし俺からも離れていった。

今の美羽を追うのも無粋だと思い、俺も皆のところに戻った。

「すみません、神童センパイ」

「いや、いい……気にするな。それにしてもさっきの女の子ーあのベータに似ている

と思つたのは俺だけか？」

「いえ、俺も思いました。風貌や身に纏う雰囲気は違いますが、顔立ちとかはそっくりです。すね」

「俺も最初は、そう思いました。何処か面影があるって。でも、同一人物ではないと思います。ただ似ている……それだけだと思います」

とはいえ、美羽自身にも謎は多い。

サッカープレイヤーとしての美羽の事はもちろん知らないし、俺と話す時以外は、なんだか一定の距離を置いて話している感じが、さっきの会話から感じ取れた。

一体美羽は、何者なんだろう？

そんな事を考えていると、スタジアムの扉が再び開かれる。

そこには円堂監督、鬼道さん、そして豪炎寺さんの3人が立っていた。

「円堂監督！」

俺達雷門メンバー。そして、他の選手達も、次第に集まってくる。

例の二人も、そして美羽も、離れた位置ではあるけど、円堂監督の下に集まっていた。



「よし、全員揃っているな」

「あの、監督。この集まりは一体……？」

「君達も既に察していると思うが、ここに居るのは今年のホーリーロード本戦、そして日本における優秀なチーム、選手から抜擢した日本のトッププレイヤー達だ。そして、今日ここに集まってもらったのは、君達が選ばれた選手であり、候補選手だからだ」

神童センパイの問いに対し、豪炎寺さんがするように口にする。

やはりここにいるのは、ホーリーロード本戦やドラゴンリンクやアンリミテッドシャイニングのような強豪チームから選ばれた選手、そして俺達が知らない優秀な選手達の集まり……という事らしい。

けど、候補選手って……？

「あの、候補選手とは一体……？」

「……実はこれは明日、正式に発表になるんだが……今から約一ヶ月後。10年間凍結されていた、“フットボールフロンティアインターナショナル”が、急遽開催される事となった」



「凄いよ！天馬！僕達、日本代表の候補選手だつて！」

「信助……ああ！俺達、とうとうここまで来たんだ！世界と戦える一歩手前まで！」

世界と戦う。

つまり、日本代表となつて勝ち進んだ先には、イタリアのフィリアやジャンカルが必ずいるはず。

……まさか、こんなに早く再戦の機会チャンスが来るとは思わなかった。

もちろんまだ代表じゃないし、イタリアと戦うには、まずアジア予選を突破しないといけないけど……。

「世界……！」

「世界か……！」

「僕達も挑戦出来るんだ……世界レベルのサッカーを相手に！」

皆F F Iの開催、そして代表候補になれたという事実には、歓喜とやる気で満ち溢れていた。

「……だが、あくまでここにいるメンバーは代表候補選手だ」

「現在、ここには24名の選手に集まってもらっている。ここから更に、三日後に行われる代表選考試合で16名まで絞り込むつもりだ」

「今から二つのチームに分かれてもらう。ゴールキーパーは各チーム2名。前半と後半で分かれてプレーをしてもらい、その上で判断する」

16名……つまり、この中の8人が落とされる、という事だ。

この中にいるのは、日本トップクラスの選手達ばかり。自分のサッカーを全てを出さなければ、代表には決して選ばれない。

皆もそれを理解しているから、円堂監督達のこの言葉でこの場の気が引き締まった。

「尚、個人のプレーを公平に判断する為、この代表選考試合においては連携技、必殺タクティクス、化身関連の全てを禁止する。無論個人技やプレーの連携にまで口を出すつもりはない。この試合で、己の力を余す事なく全てを發揮してもらいたい」

なるほど……連携技、つまり合体技やシュートチェインはNG。

タクティクスは勿論、化身や化身アームドといった力も、全部禁止となるのか。

この中には、化身の力を使えない選手も多い。もちろんその力に対抗出来るだけの力があるからこそ、ここに呼ばれているわけだけども、今回は公平的にいつそ禁止した方が良いというのは十分わかる。

「……それでは、これよりチーム分けを発表する」



・Aチーム（ホームカラー）

1. 千宮路大和（ドラゴンリンク）
2. 護巻徹郎（ドラゴンリンク）
3. 霧野蘭丸（雷門中）
4. 真狩銀次郎（白恋中）
5. 江島一八（アンリミテッドシャイニング）
6. 黒裂真命（聖堂山中）
7. 紅月美羽（???)
8. 松風天馬（雷門中）☆

9. 貴志部大河（木戸川清修中）
10. 白竜（アンリミテッドシャイニング）
11. 雨宮太陽（新雲学園）
12. 西園信助（雷門中）  
・Bチーム（アウエイカラー）
1. 兵頭司（月山国光中）
2. 森村好葉（漫遊寺中）
3. 狩屋マサキ（雷門中）
4. 黒壁鉄心（???）
5. 雛乃金輔（新雲学園）
6. 真帆路正（幻影学園中）
7. 錦龍馬（雷門中）
8. 神童拓人（雷門中）☆
9. 雪村豹牙（白恋中）
10. 剣城京介（雷門中）
11. 南沢篤志（月山国光中）
12. 三国太一（雷門中）



これが、代表選考試合におけるチーム分けだ。

それぞれのゲームキャプテンとして、Aチームは俺、Bチームは神童センパイが務めることになる。

ゴールキーパーは背番号1番が前半、12番が後半に出場する形式だ。

——試合は三日後。

それまでの間、俺達Aチームは雷門。神童センパイ達Bチームは帝国でそれぞれの練習を行なう事となった。

## 第八話 選考試合前日くAチーム編く

l Side. 松風天馬

F F I V 2 の日本代表候補として召集された日から、早くも二日。

つまりいよいよ明日、代表を決める選考試合が行なわれる。

円堂監督が言っていたように、昨日 F F I V 2 の開催が大々的に世界各地で発表となり、一夜明けた今日も、メディア関連はその話題で持ち切りだ。

ただ、各国のサッカー協会や候補選手には、俺達同様に既に通達があつたようで、今こうしている間も各国の代表選手が次々と選ばれている。

イタリアも既に代表選手が決まっているようで、その中には勿論あの二人の名前もあつた。

——俺も、負けてはいられない。

現在、日本の候補選手 24 名からチーム分けされ、俺は A チームとして明日の選考試合に出る。

A チームはこの二日間、雷門中のサッカー棟で練習を行なっており、今現在も練習中



だ。

日本各地の中学、チームから集まったとはいえ、ここにいるのは日本の少年サッカー界のトッププレイヤー達。即席チームとは思えない程、この二日間で連携が上手く取れてきている。

ローとは、思う。

「貴志部さん！霧野さんが護巻さんのフォローに入ります！一旦後ろにパスを！」

「わかった、頼んだよ！」

「真狩さん！FWを引き付けてからこちらにパスを！黒裂さんが上がっているので注意して下さい！」

「ああ！」

現在、この二日間の練習の仕上げとして、半分に分かれたミニゲーム形式で試合を行なっている。

分かれたメンバーは、

・Aチーム

FW 雨宮太陽

M F 松風天馬 貴志部大河

D F 真狩銀次郎 江島一八

G K 千宮路大和

・ B チーム

F W 白竜

M F 黒裂真命 紅月美羽

D F 霧野蘭丸 護卷徹郎

G K 西園信助

と、なっている。

ここまでは皆の連携も悪くない。

やはりこういういった高いレベルのプレイヤー同士の練習は刺激になるのか、この二日で皆の動きの質も良くなっている。

ただローラー問題はここからだ。

「もーろーろーっっっ」

「なっ!?!」

俺含め、こちらの意識が黒裂さんに向けられている最中、突如スピードを上げた美羽が真狩さんからボールを奪取する。

しかもDFの真狩さんがボールを奪われた事で、こちらのDFは江島さんのみ。対するあちらのオフエンスは美羽と、攻撃に転じた事を瞬時に判断して上がっていた白竜の二人。

ボールを持つ美羽に江島さんが付くものの、このままでは白竜にパスが渡り、完全にフリーの状態になる。そういう場面だ。

「通さんっ！」

「……邪魔」

しかし、美羽はそのまま突き進む。

目の前に立ちはだかる江島さんに対し、一度目線と体の僅かな動作で江島さんの意識を左に逸らし、その一瞬の硬直を突いて右から抜いた。

あまりにも自然な動作に、思わずプレーの一部始終に魅入ってしまった。

「はあああああああッ!!」

美羽と大和との一騎討ち。

江島さんを抜いた美羽はそのままゴールに向かってシュートする。

この二日間の練習で分かった事だけど、美羽のキック力も相当のものだ。ストライカー、といっても通じるくらいには、白竜や太陽と比べても決して劣っていない。

相手の意表を突くデيفフェンス、流れるような動作で抜くドリブル、ストライカーと遜色ないシュート力。

美羽本人が言うように、正にオールラウンドに動けるプレイヤー。

こんな凄い選手が今まで知られていなかったなんて、正直今でも信じられない。

『はあっ……シュートブレイクッ!!』

対する大和も、必殺技で美羽のシュートを受け止める。

本来あの技は、激しい蹴りの連打でボールに負荷を掛け、最後に蹴り上げたボールが空中でシュートの威力を爆散させる技だ。

しかし美羽のシュートは、その負荷では爆散出来なかったようで、空中に蹴り上げた

ボールは再びゴールに向かう。

「……が。」

「……くっ！」

そのボールを、真正面でガツチリとキャッチする大和。

爆散されなかったとはいえ、蹴りの連打で威力が弱まったシュートは、そのまま大和の手の中で収まった。

「チッ………」

「よし、行けッ！」

シュートを止めた大和から、真狩さん、そして俺へとパスが渡る。

相手の黒裂さんをドリブルで抜き、ヘルプで護巻さんが目の前に来たところで、前線の太陽へとパスを出した。

「頼む！太陽！」

「任せて、天馬！……はあああああッ！」

ボールが渡ったところで、太陽は腕を大きく振り下ろし、稲光走る暗雲を切り裂き、天を引き裂く。

晴天の空の中、ボールが空中で炎を灯す。

その業火は渦巻くエネルギーと化し、太陽はそのボールに蹴りを入れ、シユートを放った。

『サンシャインストームツ!!』

『ツ、はあッ！……ぶっ飛びパンチ…改ッ!!』

進化した信助のぶっ飛びパンチ。

ブレイブニール戦後の課題だった身体の扱い方、そして足腰のバネの使い方、それをフルに活かした上で、必殺技の威力向上に繋げた。

……しかし。

「っ、うわあああああッ！」

ズドオンッ!

太陽の凄まじい業火のシュートは信助の拳を弾き、そのままゴールに突き刺さった。  
これでようやく、1-0だ。

……それにしても。

「凄いよ、太陽! いつの間にあんな新必殺技を!」

そう。先程の太陽の必殺技は、俺も初めて見るものだった。

太陽も先の未来での戦いにおいて、同じ時空最強イレブンの一人として少しの間一緒にプレーしていたけど、あんな必殺技は見た事がなかった。

「うん。つい最近、完成したばかりだからね。実はあの戦いの後、密かに作り上げていたんだ。化身の力に頼らない、僕だけの必殺技を。この前の雷門との練習試合には間に合わなかったけど、このシュートで、代表選考や世界の強豪達に挑戦するつもりさ」

そう語る太陽の表情は、自信に満ち溢れていた。

確かに以前までの太陽は、化身による必殺シユート、そして未来での戦いで得た化身アームドの力を主体としたストライカーだった。

劍城や白竜のような個人の必殺技を有していなく、その化身の力で消耗は激しかった。

時空最強イレブンではMFとして参戦していた為、あまり露見されなかつたけど、ストライカーとしてそこは大きな弱点だった。

しかしこの必殺技……その弱点を克服できるどころか、必殺シユートとしても太陽の化身技に匹敵……いや、もしかしたらそれ以上の威力を秘めているかもしれない。

「大丈夫かい？ 信助君」

「う、うん………ありがとう、太陽……」

俺がそのように思っていると、太陽は弾かれて倒れていた信助に手を差し出していた。

その手を取り、起き上がる信助の表情は……あまり良くはない。

……これは昨日の練習の後、信助本人から聞いた事だけ………どうやら信助は、キーパーとしての自分の力に自信を無くしているみたいだ。



イタリアのGKジャンカルの存在。そして自分との比較。

ジャンカルの技術を自分の中に取り込もうとすればするほど、その実力差が明確になってくるーと、本人は口にしていた。

『……天馬もあの試合からまた更に上手くなったし、この前のゴッドウインドも、以前よりパワーアップしていた。多分僕のぶつ飛びパンチじゃ世界どころか、日本のトッププレイヤーにも通用しない。こんなんじやイナズマジパンのゴールを守れないよ……』

『そんな事ないよ！ぶつ飛びパンチが通用しないならもつと特訓して技の練度を上げればいいし、信助には化身や化身アームドがある！信助だって立派な雷門のGKなんだから、イナズマジパンのゴールだって守れるさ！』

『……化身や化身アームドだけじゃ、この先を相手にするのは無理だよ。どうしたって、三国先輩やジャンカルのように化身を使わずに、それと同レベルに渡り合える力が必要なんだ』

……信助も、一種の壁にぶち当たっている。

今日の練習で少しでもその不安が晴れればと思っていたけど、あの表情を見るからに

不安は更に募っているはずだ。

選考試合は明日……正直、これは今すぐ解消出来るものでもないし、GKとしての知識もない俺がアレコレ言ったところで、信助の悩みはきつと晴れない。

これは信助自身で乗り越えてもらうしかない。信助なら、きつと大丈夫だ。

そして……このチームの問題は、まだある。

「おい、紅月！なぜあの場面で俺にボールを寄越さない！あそこで俺に渡していればフリーでシュートを決められただろう！」

「はあ？なんで私が貴方なんかにパスを出さなきゃいけないの？私がああのかいDFを抜いた時点でフリーになったんだから、貴方に渡す必要なんてどこにもないんだけど？」

俺達のいるゴールの反対側で、そんな会話が聞こえて来る。

声の主は、白竜と美羽だ。

会話の内容からして、先程の相手側のオフエンス時に、ボールを奪った美羽がフリーの白竜にボールを渡さなかった事に関するものらしい。

俺は太陽と信助と共に、反対側にいる白竜と美羽の場所まで移動する。

「あんな真正面からのシュート、キーパーも万全の態勢で止められる！サイドにいた俺にパスを出していれば、その一瞬の動作でキーパーの反応を僅かでも遅らせて、シュートを撃てたはずだ！現に、お前のシュートは止められただろう！」

「だったら、もつと早く前に飛び出す事ね。貴方のスピードじゃ私のパスに追い付けない。通らないパス出すくらいなら、私自ら撃った方が遥かにマシだわ」

「なんだと……っ!?!」

「はい！ストップ、ストップ！美羽も白竜も落ち着いて！」

二人の争いがヒートアップしそうなところで、止めに入る。

これが、このチームにおける一番の問題。

——美羽が俺以外の皆と、全然噛み合わない。

昨日も別の人と起こった争いだけど、美羽のプレーはとにかく自由過ぎる。

確かに技術面において、オールラウンドに動ける選手として最初は誰もが一目置いてただけど、チームプレイを必要とする場面で、美羽は殆どソロでその場面を切り抜けてしまう。

つまり連携が成り立たないわけで、こうした選手間の不満が飛び交うのは必然だっ

た。

「天馬……っ、しかしだな……!」

「えー! 私に落ち着いているよ? 天馬!」

明らかに怒りの表情を浮かべている白竜に対し、美羽は先程の態度から一転して明るい笑みを見せる。

そう。こんな風に、俺に対してだけ態度が変わるように、プレーの連携も何故か俺とだけ噛み合う。

美羽のパスは、何とか人を走らせる。

相手の走力の一歩先を行くパスを美羽のキック力から生み出している為、偶に美羽の気紛れで他のメンバーにパスが行っても、大抵追いつけないか、ボールの勢いが強過ぎる確保出来ず失敗する。

——日本各地から集められたトッププレイヤー達が、だ。

俺も最初の一、二回はパスを受け取れなかつたけど、何となく美羽が出したいタイミングに合わせて走り出す感覚が掴めてから、美羽は頻繁にパスをくれる様になったし、俺自身もボールを確保出来る様になっていた。

一応他のメンバーにもこの事は伝えているんだけど、流石に二日間での一方的な連携の噛み合いは難しく、度々争いになる。

「と、とにかく！今日の練習はもう終わり！皆、明日の試合に備えてしっかりと休んで！」

元々このミニゲームで今日の練習を終わりにするつもりだった為、一旦この場を鎮める為にそう皆に声を掛けた。

信助の事や美羽の事……他にも色々懸念は残るけど、明日はキャプテンとして、皆のプレーを引き出していかないと。

l Side out. 松風天馬

◇◇◇

l Side. 紅月美羽

l l l チームプレイ、ね。

選考試合前日のチーム練習が終わり、帰り途中の河川敷前駅構内のベンチに私は座っていた。

思い返しているのは、この二日間のチーム練習。

日本代表の候補と呼ばれる選手達だから、少しは期待していた。……けどやっぱり、今までの奴らと大して変わらない。

チームプレイ、連携。

この二日間で、嫌と言うほど他の選手から言われてきた。

私のプレーが、彼らにとって対応出来ないものであるから、"もつと合わせろ"、と口煩く言われる。

「何が、チームプレイよ……」

そんな事を口にしながら、ふと窓の外を見ると、夕暮れに差し掛かる河川敷のサッカーグラウンドに、一人の人影が見えた。

何度も加速しながらドリブルし、自身の身に不安定な風を纏いながら、ゴールとゴールの間を何往復もしている。

——松風天馬。

私達には明日に備えてよく休んでと言っておきながら、チーム練習が終わった後も、ここで練習をしていたみたいね。

……天馬だけは、私の意図しているプレーの本質に気付き、それを実行して見せていた。

天馬の事を認めつつも、やはり何処か感じていた私の不安を、彼は見事に吹き飛ばしてくれた。

天馬と一緒にプレーしている時だけは、本当の意味でサッカーが楽しいと感じている。……いや、感じ始めている。

「……やっぱり良いなあ、天馬は♪」

最近是天馬の事を考えていると、心が暖かくなる。

これが天馬に対する"期待"から来るものなのか、それとも別の何かの感情なのか。それはまだよくわからない。

でも……天馬と一緒に代表になりたい。

この気持ちだけは、本物だと自覚している。

「……ホントは一緒に練習したかったけど、今日は無理かな？……またね、天馬♪」

そう口にし窓から離れ、たった今来た電車に乗り込んだ。

明日の試合……

周りがなんと言おうと、私は、私のプレーで代表になってみせる。

……天馬と、一緒に。

l Side out. 紅月美羽

◇◇◇

「もつと……もつと速く……っ」

Aチームの練習が終わり、松風天馬は河川敷でただ一人、試合前の最後の練習を行っていた。

もう日が沈み始め、しばらくすれば辺りが真っ暗になるこの時間帯。



ドリブルでフィールドを駆け走り、時に加速する事で、フィリアと対峙したあの時のスピードを再現しようとしていた。

「（スピードを上げるだけじゃなく、そのスピードを維持しながら、足下の技術で相手を抜くイメージ……フィリアとの攻防を思い出して……）」

丁度センターラインに差し掛かったところで、天馬は瞬間的に更に加速する。

目の前に相手がいるイメージで一度止まり、左にドリブルを逸らす事でフェイントを一度入れる。

そこから身体を反転させ、右から相手を抜く……この時に足下からボールを離さないキープ力と加速を意識する事で、天馬の目標とする動きに達する事が出来るのだ  
が……。

「……ッ!? うわあああああ!」

バタンツ!

身体を反転し加速する勢いと、ボールを上手くキープする動きが噛み合わず、ボール

に脚が絡まった事で大きく前方に倒れてしまった。

「いつつつ……あともうちよつとなんだけどなあ……。あそこから一気に加速してスピードを維持しながら、足下でボールを上手くコントロールするのがこんなに難しいなんて……」

天馬が挑戦している新たな必殺技。

動きの形としては"そよ風ステップ"に似ているが、その内容は大きく異なる。

相手を軸に身体を反転させ、相手を風の軌道に乗せる事で抜き去るのがそよ風ステップなのに対し、一度左へのフェイントを見せ、緩急を加えた反転運動から瞬間的に加速させて抜くのが新技の全容だ。

動きの内容はおろか、そのボール運びも異なる。

「いつその事そよ風ステップのように向かってくる相手の力も利用するべき……？いや、それだとあのスピードを活かしきれないし、現にその抜き方はファイリア世には通用しなかった。それに左へのフェイクが入る事で、この技も活きてくるし……」

「……やっつてるな、天馬」

ビクッ。

考え事をしていた天馬は、急に掛けられた声に思わず身体を震わせた。

「すまない。考え事をしてたか」

「っ、神童センパイ！」

突然の声の主、それは同じくチーム練習を終えてこの河川敷に来た神童拓人だった。

神童はBチームのキャプテンとして候補選手に選ばれており、この二日間は帝国学園で練習を行っていた。

帝国学園から神童の家までは、雷門中、そして河川敷も通る為、帝国学園から帰宅途中だった神童は、河川敷で練習していた天馬の姿が見え、声を掛けたのだ。

「おいおい、"センパイ"は無しだとあれ程皆で話しただろ？俺達は代表候補選手なんだから、いつまでも部活動の先輩後輩は無しだ」

「あ！すみません……つい、言っちゃうんですよね。——"神童さん"」

先輩呼びの禁止。

これは選考試合のチーム分けが終わった後、雷門メンバーで集まって決めた事だった。

最初に口にしたのは雷門の候補選手の中で最上級生の三国であり、神童が先述したように部活動の枠組みから外れた代表候補という集まりの中で、先輩後輩の関係は無しにしようというのが理由だ。

といつても、それで年齢に関して対等の間柄にしようというメンバーはいない為、それぞれ先輩には“さん”付けで呼ぶようにしていた。

「……じゃあ神童さんも、練習帰りだったんですね」

「ああ。……と言っても、今日は早めに切り上げた方だ。昨日はもう少し遅い時間まで

練習していたからな」

「あ、じゃあそれで昨日は会わなかったんですね。一応昨日も同じくらいの時間帯にここに居たんですけど……」

「……あれから天馬は一時練習を切り上げ、神童と河川敷に設置されているベンチに座っていた。」

話すのは互いの近況報告「……といってもお互いチームのキャプテンであり、チームの情報を事細かに話すつもりはない。あくまで触れる程度に話すだけだ。」

「A<sup>そっ</sup>チーム<sup>ち</sup>の調子はどうだ？」

「もちろん、皆気合入ってます……けど、色々と不安や問題もあって、少し上手くいってませんね。神童さんの方は？」

「……こつちも、チームとして万全の状態……とは言えないな。雷門の皆や他の選手も気合いは十分だが、不安要素もあるのは確かだ」

互いにキャプテンという立場上なんとかしたかった気持ちはあったものの、今回集められたのは日本各地から選ばれたトッププレイヤーという事もあり、皆自身のサッカー

スタイルというのを確立させている。

そんな我を持つ者同士が集まれば、些細な反発も大きなものと化する。

それを修正しようとするには、二日間という時間はあまりに短かったと言える。

「……でも、やるしかありませんよね！明日いよいよ日本の代表が決まるんですから、俺自身も皆も自分のプレーを全部引き出せるように、キャプテンとして頑張りたいです！」

「……ああ、そうだな」

天馬の言葉に、思わず笑みを浮かべてそう答える神童。

時空最強イレブンを集める旅の中、キャプテンとしての自分に自信を無くしていたあの頃の天馬に比べて、大分頼もしくなったと改めて神童は感じていた。

そして、あの頃よりも――。

「――こうして二人でこの場所にいると、あの頃を思い出すな」

「……？あの頃、ですか？」

「ああ。俺と天馬が勝負して、初めてそよ風ステップを使った日の事だ」

——数ヶ月前の栄都学園との練習試合。

当時フィフスセクターの管理下にあり、試合の勝敗が定められていた頃。

その練習試合も3-0で雷門の敗北という指示が出されていたが、天馬の想いに感化された神童が思わずゴールを奪ってしまい、3-1という結果で勝敗指示を破ってしまった。

その責任を負わされる形となり、当時監督であった久遠道也が監督を解任された事で、神童自身を自主退部にまで追い込む事となる。

それを良しとしない天馬も説得したがその気持ち揺るがない事を悟り、最後に一度だけ、神童の必殺技フォルテシモを見せて欲しいと頼み、信助と共にこの河川敷に集まったのだ。

「——で、その後フォルテシモを見せてもらって、俺達も頑張ろう！って凄く思いました。だからこそ、本当のサッカーが出来るようになったら戻ってきてくれますか？なんて聞いちゃって……そしたら神童さんが俺からボールを奪って何か勝負になったんですよね」

「そうだな。あの時の俺は、とにかく頑なに本当のサッカーというものを否定していた。そんなもの、あるはずが無いと。だからこそ天馬の言葉は、俺の心を強く揺さぶった」

最初は信助と二人掛かり、そして勝負が長引くにつれて、天馬は神童相手に一人でボールをキープする様になっていた。

ボールをキープし、加速する。

正に先日のフィリアと対峙した時と同様に、天馬はその勝負の中で進化していったのだ。

そして完成した初めての必殺技が「——」そよ風ステップ」。

「あの時起こした小さな風が、——ここまで大きな風となつて、俺達を——ここまで導いてくれた。あの時お前に負けてなかったら、今こうして日本代表候補としてサッカーする事もなかったかもしれない」

松風天馬が起こしたそよ風が、革命という名の風となり、未来をも巻き込む強大な嵐ストームとなった。

そしておそらく、この風はこれから成長していくだろう。

——世界という、強敵を相手に。



「…………天馬、お前ならきつと……」

——代表は、まだ決まっていない。

しかし神童は、何処か確信めいたものを感じていた。

「…………天馬、お前には感謝している。俺達をここまで連れてきてくれたのは、紛れもなくお前だ。——だが、感謝それと代表これの話とは話は別だ。明日俺は、俺の全てを出し切ってお前達と戦う。お前も代表になりたかったら、全力で来ることだ」

「神童さん…………。——もちろんですよ！俺は絶対、日本代表になってみせます！だから、明日は絶対負けませんよ！神童さん！」

互いにベンチから立ち上がり、握手を交わしながら告げる天馬と神童。その瞳は、両者力強いものを秘めていた。

両チーム不安要素を抱えながらも、時間は刻々と迫っている。

いよいよ、明日。

十年振りの、新生イナズマジャパンが——決まる。

## 第九話 選考試合前日～Bチーム編～

l Side. 神童拓人

「錦！こつちにパスだ！」

「やらせるかよッ！」

『ッ、アクロバットキープ！雛乃！』

「雪村君！」

ボールを持つ錦に雪村がパスを要求するが、真帆路さんがスライディングで迫ってきたのを見て必殺技でボールを死守する。

そして一度雛乃にパスを出し、そのまま前線の雪村へとパスが渡った。

1ー1 F F I V 2の代表候補選手が集められたあの日から二日経ち、Bチームとして明日の選考試合に挑む俺達は、帝国学園で練習を行なっていた。

今日は明日の試合に向けての最終調整。

昨日チームとしての練習を夜遅くまで行なった為、今日一日は各々自分の調整に時間を使つてもらふ事にした。

俺は今水分補給ということの外しているが、俺含めたMF、FWの殆どは、あのよう  
に実戦形式で調整をし、南沢さんや三国さん、兵頭さんはPK形式での練習を行なつて  
いる。

日本代表を掛けた試合という事もあり、皆気合いは十分と言える。

——しかし、天馬のいるAチームと比較しても、このBチームは不確定要素が多い。

「——ッ、あわわわわわ……っ、ひゃんっ」

「……えーつと、大丈夫？」

今の声は、フィールドの隅の方でパス練習をしていた狩屋と森村好葉という女子の  
声だ。

状況から察するに、狩屋からのパスを上手くトラップ出来ず、森村はボールを顔面  
で受け止めてしまったようだ。

——森村好葉。

正直この選手が、このチームで一番不可解な選手だ。

中学はあの漫遊寺中らしく、森村はそのサッカー部に所属していたみたいだが……お世辞にも、日本代表候補に呼ばれる程の実力があるとは思えない。

ドリブル、パス、ディフェンス……どれを取っても平均レベル。

先程のように偶にミスをする事も踏まえると、ドリブルのみは平均以上だったあの頃の天馬の方が、まだ試合を組み立てる上では上手かったかもしれない。

……一体なぜ、彼女のような選手が代表候補として呼ばれたのか。

「森村、少しいいか？」

「あ………神童、さん………」

俺は森村と狩屋がいるフィールドの隅の方へ移動し、森村に声を掛ける。

……相変わらず森村は、他人と話す時少し怯えてしまう。

こうしてサッカーの練習は真面目に取り組んでくれているが、こうも警戒されてしまうと連携面は若干不安だな。

「君の中学、漫遊寺中はサッカーの名門だと聞いている。部の方針か、ホーリーロードのような全国大会には出場しないが、優れた選手が多い事で有名だ」

漫遊寺中といえ、元イナズマジヤパンの木暮夕弥さんの母校としても有名だ。

聞く話によると、サッカーで心身を鍛える事が部の方針であり、ホーリーロードのよ  
うな全国大会はおろか、他校との練習試合も殆ど行なわなわらしい。

しかしその実力は本物で、ホーリーロードに出場すれば優勝候補筆頭になるだろうと  
も言われている。

「……しかし森村には悪いが、君はお世辞にも代表に選ばれる程の実力があるとは思え  
ない。それは、この二日間の練習を見ているも明らかだ」

「……神童さん。流星にそれは直球過ぎませんか？」

俺の言葉に、狩屋が何か言いたそうな表情でこちらを見るが、そのまま続ける。

「何故、君のような選手が代表候補に？何かそこら辺の事を聞かされたりは——」

「……ウチにも、分からないんです」

俺の言葉を遮るように、森村はポツリとそのように呟いた。

「……確かに、ウチの中学のサッカー部は、皆とても上手いんです。とても上手くて、ウチなんか、どんなに頑張っても勝てません……なのに」

そこまで口にして、森村は俯いてしまう。

「……なのに、なんでウチなんかこんな場所に呼ばれてるのか、全然分からないんです……っ。皆の方が凄いのに……皆の方が、頑張っているのに……」

……どうやら森村本人も、何故自分が呼ばれたかは分かっていないみたいだ。

正直、実力ではない、何らかの理由で今この場にいるのではないかと、疑っている節は確かにあった。

そうでもなければ説明がつかない程に、この選手の実力はこの場で浮いている。

しかし、この表情を見るとウソを付いているとは思えない。森村自身、おそらくこの状況にかなり困惑している。

「じゃあ森村さんも、普通に円堂監督から呼ばれただけって事か」

「……いい、いえ。ウチに連絡して来たのは、円堂さん……ではありません」

狩屋がふと口にした言葉に、森村はどのように反論する。

……どういう事だ？

「円堂監督から連絡が来たんじゃないのか？」

「は、はい……声の雰囲気とかは似ていましたが、違う人でした。名前は確か……」トウドウ「、と言ってたと思います……」

「トウドウ」

……聞き覚えのある名前だが、気のせいか……？

俺を含め天馬や剣城、他の雷門メンバーも、皆円堂監督からの連絡であの日集まった。それは太陽や白竜、そして天馬の話では紅月美羽という選手も同じだった。

だからつきり、あの日各選手に招集を掛けたのは円堂監督、もしくは鬼道さんや豪炎寺さんだとばかり思っていたが、なぜ森村にだけ……？

「……わかった。色々とすまなかった、森村。練習を続けてくれ」



そのような言葉を残し、この場は狩屋に任せて離れる。

……わかった事も増えたが、謎も更に深まった。

森村自身は、一先ずサッカー経験者と言える。但し、実力はサッカー部に入部してきた頃の天馬や信助よりも下だ。

森村本人もそれは自覚しているし、彼女が代表候補この候補に関して関わっているわけではないのはわかった。

……つまり、実力以上の……それこそ、この場に呼ばれるだけの何か、彼女にはあるという事だ。

それが一体どういったものであり、一体誰の思惑なのか……。

「……またあいつは、一人で練習しているのか」

森村や狩屋から離れ、次に視線を移したのは、皆から離れた場所で一人、リフティンクをしている黒壁鉄心だ。

先程の森村とは対照的に、技術は優れている。

動きは昨日のチーム練習でしか見てないが、おそらく、このチームでもトップクラス

の実力者と言える程の技術とサッカーセンスを持ち合わせている。

——しかし彼も、その不安要素の一人。

この場面から見ても分かるように、彼はチームの誰とも馴染もうとしない。

彼のポジションはDFであり、本来皆と練習をしようとするなら、先程の狩屋と共にDF陣で森村との練習に付き合うか、フィールドで行なっているFW、MFの練習に参加するはずだ。

もちろん各個人で調整するように伝えたからそれでも構わないのだが、いくら代表の選考試合とはいえ、チーム内の連携は必要だ。

特に互いの事を何も知らない訳なのだから、昨日のチーム練習含め、もつと周り馴染むべきだと思うが……。

「こんな所で一人で調整か？ 黒壁」

俺はリフティングをしている黒壁に、そう声を掛けた。

黒壁の耳にも一応届いたようで、リフティングをしながら一瞬こちらに視線を移すと、再び目の前のボールに意識を移した。

「なんだ、仮キャプテンさんか。何か用か？」

「いや、お前も俺達の練習に混ざらないか？昨日の練習を見るに、凄い選手だというのは俺も理解している。きつとお互い良い刺激になると思うが……」

「断る」

……何の躊躇もなく、キツパリとそのように告げた黒壁。

「……何故だ？」

「俺達は今まで代表候補だ。別に一緒に代表としてやると決まった訳じゃない。そんな奴らと馴れ合いなんて俺は御免だね」

「……その言い方だと、自分は絶対代表に選ばれるという口ぶりだな？」

「そうだ」

Bannon。

そこまで口にして、黒壁は遙か空高くまでボールを蹴り上げ、ようやく俺と対面で視線を合わせる。

「ここにいる連中の事は知ってるよ。ホーリーロード…だっけ？そんな全国大会とやらに出てたからある程度はな。……まあ、よく分かんねえのもいるが。……それを知った上で、あの程度のレベルなら俺は確実に選ばれる。これは自信とかじゃなく、明確な事実だ」

「あの程度のレベル……だと？」

……明らかに、俺達を下に見ているのはわかった。

こうして真正面で話すのは初めてだが、奴の言葉の一つ一つに憤りを感じる。

俺達はあのホーリーロードを、死力を尽くして戦った。

革命という使命もあったが、あの全国大会はどのチームも真剣にサッカーに向き合っている、全力でぶつかり合った。だからこそお互い本当のサッカーというものを肌で感じ、全てを出しきれた。

それをこの男は……ッ。

「おいおい、俺に怒りをぶつけられても困る。これは別に、何もアンタらのせいじゃない。……管理サッカー……なんて、ふざけた制度を作った奴らのせいさ。あの制度のせいで、日本のサッカーはここまで落ちぶれた」

「……ッ、お前に何がッ！」

「わかるさ。現に世界はもう、日本なんて眼中にもないぜ？……第一回FFI優勝国が、聞いて呆れるよな。——それに、雷門アの連中タはもう分かつてるんじゃないのか？ 本当の世界レベルとの差を」

「ッ、それは……」

反論、出来なかった。

本当の世界レベルとの差……それをこの前のイタリア戦で嫌と言う程肌に感じ、思い知らされたばかりだからだ。

未来での戦いを経て成長した俺達でも、同点にすら追い付けなかった。

あれが世界の標準とは思わないが、このFFIV2で優勝するには、あのレベルが競い合う舞台上で勝ち抜かなければならない。

「凶星だろう？……ま、通用したとしても精々アジアレベルだ。それよりも上の舞台上で勝ち上がれるとは、俺にはとても思えない。だからこそ——」

そこまで口にし、目線を上に移動させる黒壁。

それと同時に、先程奴が蹴り上げたボールが落ちてくるのが見える。ここは相当天井が高いとはいえ、かなり上まで蹴り上げられていたようだ。

黒壁はそのボールを上手く吸収し、優しく脚でトラップする。

「……俺は個人として、この祭典まつりを楽しむ事にするぜ」

その言葉を最後に、黒壁は俺から離れていった。

……あの高高度からのボールを容易くトラップ出来る程の高等技術。

悔しいが、奴自身の実力は本物だ。

あのテクニクを何処で身につけたのかは分からないが、実力だけでいえば代表最有力候補なのも事実。

「……眼中にない、か」

奴にはそれを言えるだけの説得力が、ある。不思議とそんな風に感じた。

確かにブレイブニールのような世界の強豪からしたら、俺達のサッカーは眼中にもないのかもしれない。

しかし、それでもローロー。

「……俺も、こうしちゃられないな」

……明日は試合当日である為、今日は早めに練習を切り上げる予定だ。

俺はその残り少ない練習時間に取り組もうと、FWとMFが行なっている練習に再び合流した。

l S i d e o u t . 神童拓人

◇◇◇

「ローローはい、分かっています。ですが、やはり両チーム万全とは言い難いでしょう、久遠さん」

雷門中サッカー棟のミーティング室。

松風天馬率いる代表候補Aチームの前日練習が終わった後、円堂守は一人、この場所である男に電話を掛けていた。

その男の名は、久遠道也。

天馬達雷門中の元監督であり、十十年前、円堂守率いる初代イナズマジヤパンを世界一に導いた名監督である。

『チームとして噛み合わないのは、百も承知だ。そういうメンバーをあつめた男が選んだのだからな』

「……今回は流石に、俺も不可解ですよ。俺達の頃も飛鷹がいましたが、彼女はある意味それ以上に難儀になるはずです。それに他の二人も……」

『円堂。今回俺達に、代表選考の資格はない。誰が代表になるかは全てあの男次第だ。それを踏まえた上で、代表監督を頼む事にしたんだろう』

「……そうでしたね。俺らとしては、また久遠さんにお願ひしたかったです」

……FFIV2の開催にあたって、ある特別ルールが追加された。

それが、前大会の代表監督を任命出来ないというルール。

これは各国の事情から、国同士の試合において優位性を残さない為の特別ルールであ



り、日本は前大会の代表監督である久遠道也を続けて代表監督に選ぶ事が出来なくなっていました。

これにより日本は別に代表監督を選ぶ事になった訳だが――。

『……神童達も、おそらく最初は納得しないだろう。だが今の日本において、日本が再び世界一を勝ち取る為には彼の力が必要だ。……それに、コーチにはあの男が就くんだったな?』

「はい。既に帝国の監督業務も引き継ぎを終えているらしく、これからはF F I V 2のコーチ職に集中出来るみたいです。……俺も何かしらで力になれば良かったんですが」

『こうして日本サッカー協会として動いてもらえるだけで十分だ。――それに、お前には例の別件の事もある。いつ発つ予定だ?』

「明日の試合が終わり次第、直ぐに発とうと思います。もう準備は、出来ているので」  
『……わかった。では引き続き頼むぞ、円堂』

分かりました――と、円堂は一言告げて電話を切った。

フットボールフロンティアインターナショナルV2。

その突然の開催の裏では今着々と、それぞれの思惑が交錯されようとしていた。



l Side. 神童拓人

「なあ、劍城。お前は どう思う？ 今回の選出について」

チーム練習が終わり、俺はこれから入院している優一さんの所へ行くという劍城と共に、雷門中の方へと向かっていた。

辺りは夕暮れ時であり、西の空には太陽が沈み掛かっている。

「……何とも言えませんね。 妥当なメンバーもいますが、森村のような選手もいる。 紅月に至ってはまだ分かりませんし、神童さんの話では黒壁も一癖ありそうですしね」

俺の問いに、劍城は そのように自分の考えを述べる。

劍城には既に、今日あった事は話してある。

森村の事、そして……黒壁の事。

劍城自身も、やはり俺と同様に黒壁の話に理解出来る部分があるようで、冷静にその言葉を受け止めていた。

「紅月に關しては、遅刻して急いでいたという天馬のスピードに息一つ乱れず付いて来ていた事からも実力が高いのはわかる。性格面には少し不安を覚えたが、それでも妥当ではあるはずだ」

「……黒壁も、おそらく招集されたメンバーの中ではトップクラスの实力者です。昨日のチーム練習の時は、結局誰も奴を抜けませんでしたから」

「……森村は今のところ何も感じないが、おそらく候補選手として呼ばれる何かがあるはず。問題はそれが"何なのか"だが……」

明日が試合当日だというのに、結局もやもやした気持ちのまま練習を終えてしまった。

……俺はキャプテンとして、皆の力を引き出していかなければならない。

しかし、現時点でチームがベストの状態であるかと言われたら、そんな事はないと断

言できる。

「……天馬だったら、こんな時どうするだろうか。」

「ハッキリ言つて、こういう時は天馬の方がキャプテンとして動ける。」

天馬は俺の事をキャプテンとしても高く評価してくれるが、俺から言わせれば、こんなのは司令塔としての一つの技術で皆を引っ張つてるに過ぎない。

勿論、それがキャプテンとしての一つの形でもあるが、天馬にはそんな技術が無くても付いていきたいと思える何かがある。

仲間の気持ちになり、同じ立場に立ち、それでも尚自分の気持ちを貫いて、仲間と共にそれを乗り越えられる。

それは、雷門中キャプテンだった当時の俺には無かつた力で……。

「……いずれにせよ、両チーム不安要素はあり、明日の試合はお互いチームとしてベストな状態とは言えないでしょう。先日の紅月を見た限りじゃ、いくら天馬でもこの二日ですらチームに馴染ませるのは厳しいはずですから」

「……ああ、そうだな」

チームとしての完成度が低ければ、自ずと明日は個人同士のぶつかり合いとなる。

代表選考としての試合ならそれも有りかもしれないが、少なくともこの中の大半は日本代表に選ばれると言うのに、こんな状態で本当に大丈夫なんだろうか……？

そんな事を考えながら剣城と共に歩みを進めていると、視線の先には河川敷が見えてくる。

もうしばらく経てば辺りが暗くなるという事もあり、普段ここで練習している少年サッカーチームの姿もない。

しかし、そんな河川敷のフィールドを駆け回る、ある一人の人影が視界に入り、駅の方へ向かっていた俺と剣城は一旦その場に脚を留めた。

「あれは……」

「……天馬、ですね」

剣城の言う通り、人影の正体は天馬だった。Aチームの練習も既に終わったのか、天馬は河川敷で一人で練習をしていたようだ。

二つのゴールの間をドリブルで往復しながら、時折加速と減速を繰り返している。ローおそらく、前に話してくれた例の新必殺技の特訓だろう。

本人はまだまだと難儀していたが、あのイタリア戦からスピードが増してきているの

は明らかだ。あの必殺技の完成も、そう遠くはないだろう。

「頑張ってるな、天馬も。……思えば天馬とはずっと一緒にサッカーをしてきたが、こうして公式の場で戦うのは初めてになるのか」

「……ええ。俺も黒の騎士団として試合をした事がありますが、今はあの頃の天馬とは比較にならない程手強い。——正直、楽しみですよ。今の天馬と、公式の場で真剣勝負が出来るんですから……ッ」

いつになく気合いの入った声で、剣城はするように口にする。

……確かに、剣城の気持ちもわかる。

ドリブルだけで俺や剣城と勝負してた、あの頃の天馬はもういない。

様々な戦いを経て、この短期間で急激に成長した天馬と、明日試合で戦う。更にあのイタリア戦を経た事で、おそらく今最も手強い相手として——。

「……代表選考とはいえ、確かにこんな機会はそうそう無いな」

代表候補選出に関する疑問はある。

しかし今は、目の前の試合を……松風天馬が率いるAチームとの試合に、全力を尽くさなければならぬ。

おそらく天馬も、全身全霊を持って俺達にぶつかってくるはずだ。

「……神童さん」

「ああ。……明日は勝つぞ、劍城。本気の天馬、そして日本各地から集められたトッププレイヤー達に！その上で、代表になるのは俺達だ！」

「ツ、はい！」

……今はチームの内情にアレコレ考えても、おそらくどうする事も出来ないだろう。

だとすれば、今俺が出来る事を明日の試合で出し切るまでだ。

雷門の皆と出会い、劍城と出会い、そして天馬と出会い……。

今日まで培って来た俺のサッカーで、チームを引っ張ってみせる！

……そう決意した俺は、その後病院に向かうと言う劍城と別れ、河川敷のフィールドで蹲っている天馬の元へ足を歩めた。

## 第十話 日本代表選考試合 その1

——ホーリーロードスタジアム。

『さあ！遂にこの日がやって参りました！フットボールフロンティアインターナショナル！通称、F F I V 2 の開催が発表されてから早くも二日経ち、本日このホーリーロードスタジアムでは、日本が誇る新生イナズマジャパンが誕生致します!!』

実況の角馬王将の言葉で、ホーリーロードスタジアムに集まる観客達のボルテージは更に高まる。

あの衝撃の発表から早二日。

急遽告知された代表選考試合であり、先日行なわれたイタリアチームとの親善試合よりも短い期間でありながら、ホーリーロードスタジアムは超満員で埋め尽くされていた。

少年サッカー界の人気。そして十年振りとされる新生イナズマジャパンの発表をこの目で見届けようとする熱狂的なファンの有様が、この光景に映し出されていた。



「……本当に、凄い熱気ですね」

「ああ。何てつたつて日本代表選考試合だからな。先日のイタリア戦とは比べ物にならない程に熱くもなるさ」

「神童や天馬達が候補に選ばれてて良かったつすよね。お陰であの長蛇の列に並ばずに座れたし」

このスタジアムの熱気に当てられて、観客席に座る雷門メンバーが口々にそう話す。

その周りには、聖堂山中、新雲学園、幻影学園と、候補選手が選出されている学校やチームがそれぞれ席に座っている。

この観客席一帯は候補選手が選出された学校やチームが特別に招待された場所であり、浜野が口にするように、他の一般観客とはまた違ったルートでこの場所に来ていたのだ。

「……ふん。こんなところに招待されても意味ねえだろうが。選手なら"あそこ"に呼ばれてねえとよ」

「ま、まあまあ倉間先輩。しょうがないじゃないですか。今は神童先輩や天馬君達を応

援しましょうよ」

「……お前は悔しくないのか？影山。お前以外の一年は皆呼ばれているんだぞ？」

代表候補に呼ばれなかった事に対し、気が荒ぶっている倉間を宥めようとする影山だが、逆にそのように問われてしまう。

倉間の言う通り、雷門メンバーの中で選出された候補選手の中には、天馬、信助、劍城、狩屋と、影山以外の一年生の名が連ねている。

なのに対し、代表候補選手が世間に発表されてからというもの、特に悔しがる様子もなくこうして自分や他の皆にいつも通り接している姿が、倉間には疑問しかなかった。

「……悔しいですよ。僕だって、今まで皆と一緒にサッカーをやってきたんです。悔しくない訳がないですよ。——でも、選ばれたメンバーを見ても、僕自身が力不足なのは自分でも分かっています。だから今は、皆の事を精一杯応援しようって決めたんです！そしていつか、皆のところまで追いついてみせます！」

「影山……」

——悔しさはある。しかし、いつまでも立ち止まってるつもりはない。

影山の言葉に、倉間はそんな意気込みを感じた。

そして、その影山が向ける視線の先には、今正に、日本代表候補選手達が入場を始めていた。

『ご覧下さい！彼らが日本各地から集められた代表候補選手であり！この中から、新生イナズマジヤパンが誕生致します!!本日は24名の候補選手を二つのチームに分けて試合を行い、選手達のプレーを判断した上で、代表選手を選出致します！その選出資格を持つイナズマジヤパンの新監督は、後ほど発表とさせて頂きます!!』

「……改めて見ると、凄いメンバーだト」

「ああ。どの選手も、ホーリーロード本戦で主力だった選手ばかりだ。こんなメンバーの中で、雷門の皆が多く選出されているのは誇らしい限りだな」

代表候補選手達が次々と入場し、センターラインを境に整列する中、天城と車田はどのように口にする。

24名の候補選手の中でも、雷門メンバーが選出されている人数は8名。

やはりホーリーロード優勝校という事もあり、他の学校やチームよりも選出枠を大幅に拡大して選ばれているようだ。

——選手達が互いに礼をし、それぞれのポジションへと就く。

青い代表ユニフォームに身を包むAチームと、アウェイカラーである白を主体とした青と赤のラインの入ったユニフォームに身を包むBチーム。

観客の熱気にも負けない程の闘志を秘めた選手達が視線を交わす中、日本代表イナズマジャパンの選考試合が、始まった。

『——それでは、キックオフです!!』



・Aチーム

F W 雨宮 白竜

M F 紅月 松風☆ 黒裂 貴志部

D F 江島 霧野 護卷 真狩

G K 千宮路

・Bチーム

F W 劍城 雪村 南沢

M F 雛乃 神童☆ 真帆路 錦

D F 森村 黒壁 狩屋

G K 兵頭

◇◇◇

l Side. 松風天馬

ピーーーーッ!

遂に始まった、日本代表選考試合。

俺達Aチームボールから始まり、白竜から太陽、そして俺へとボールが渡る。

「よーっしっ、皆!攻めていくぞ!」

「」「」「」

俺はそのままドリブルで駆け上がり、目の前の雪村さんを躲す。

そこから黒裂さんにパスを出し、更にサイドを走る貴志部さんにボールが渡り、着実にボールを前線へと運ぶ。

ドリブルで上がる貴志部さんに、雛乃さんがスライディングを掛けるが、ジャンプしてそのまま黒裂さんにボールを戻す。

「良しー！」

「させるかー！」

しかし、そのパスを神童さんがカットした事で、相手にボールが渡る。

スペースが空いた右サイドからドリブルで上がる神童さんは、センターラインの辺りでボールを高く上げる。

その位置は、比較的距離が近い中盤であった為、俺はそのボール目掛けてジャンプするーーが。

「させるか、よッ！」

同じく跳んでいた真帆路さんが、ヘディングでその軌道を変える。

ボールの行き先には錦さんが走っていて、そのまま確保した錦さんが更に前線へと駆け上がる。

「通さんッ！」

『うおおおおおおお！昇り龍ッ!!』

走る錦さんに江島さんが立ちはだかるが、錦さんは必殺技で地面から飛び出た龍に乗り、抜き去る。

「行くぜよ！南沢さん！」

『ソニックショット！V2!!』

錦さんは龍から降りた軌道のまま、南沢さんにパスを出す。

南沢さんは受け取ったパスをそのまま必殺シュートに繋げ、加速するシュートがゴールを襲う。

『はあっ！シュートブレイクッ!!』

加速するシュートに一早く反応した大和も、必殺技で対応する。

幾度となく蹴りを入れる事でボールの勢いは衰え、最後のひと蹴りで空中に上がったボールは、シュートの威力が爆散し大和の手に収まった。

『おおっとおー息つく暇もない攻防の数々！南沢のシュートまで攻め込んだBチームでしたが、Aチームのキーパー千宮路の好セーブにより、Aチームピンチを凌いだあ!』

……凄い。これが日本トッププレイヤー同士の攻防か……!

数々の攻防。

以前よりもパワーアップしている必殺技。

この試合に懸ける皆の闘志が、ヒシヒシと伝わってくる!

『さあ！再び攻守が切り替わり、ボールは千宮路から護巻、そして霧野に渡ったあ！いきなりシュートを撃たせてしまったAチームだが、ここから挽回なるか!?!』



いいぞ……！

皆昨日までの練習の成果が出ている。少しずつだけど、確実にパスを回してボールを前線へと運んでいる。

相手はメンバー的にも、どちらかと言えば攻撃寄りの布陣のチームだ。

DFは狩屋以外データがないけど、神童さんを含めたあの中盤さえ抜ければ、きつとシュートチャンスは生まれるはず。

霧野さんに渡ったボールはその後幾度かのパスを経て、黒裂さんに渡る。

黒裂さんがドリブルで上がる中、その進路を神童さんが阻む事で、動きが一瞬止まる。

「ッ、天馬！」

……今の神童さんのディフェンス力は、かなり厄介だ。

対峙した事で黒裂さんもそれを感じ取ったのか、フリーで走り込んでいた俺にパスが通る。

そのまま俺はドリブルで上がるが、目の前には真帆路さんが立ちほだかる。

「行かせるかッ！」

『……真！アグレッツシブビートッ!!』

そんな真帆路さんを、必殺技で躲す。

鼓動から発するオーラで、点と点を結ぶラインを辿るように抜き去るこのドリブルは、以前よりも更に進化しており、虹色に輝くラインの激しい音波ビートの衝撃は鋭さを増していた。

真帆路さんを抜いた事で、中盤を抜ける。

俺は走り込む太陽と白竜に一瞬視線を交わし、高い位置でボールをゴール前に上げた。

「太陽ッ！」

『はあああああッ！サンシャイン……』

そのボールを追うのは、太陽。

太陽はそのまま腕を大きく振り下ろし、稲光走る暗雲を、そして天を引き裂く。

晴れた空に上がるボール目掛けて、太陽も跳躍し必殺シュートを放とうとする……

が。

「撃たせないよ！太陽君！」

そこに狩屋が跳躍を合わせてきた事で、シュート射線上を阻害する。  
——しかし。

「——白竜君！」

「な……ッ、フェイント!？」

太陽の必殺技には、炎が灯されていなかった。

始めから太陽は自分の必殺技を囷に使うことで、白竜を完全にフリーの状態にしたんだ。

「ナイスパスだ、太陽！——はあッ！」

太陽からのパスは吸い込まれる様に白竜の胸元に移動し、そのボールは回転と共に光

り輝くオーラを発する。

そして跳躍する事でボールと共に空中に移動した白竜は、更にそのオーラを強大なものとなす。

空が荒れ、渦巻く雲の下で、光り輝くオーラを発したボールに蹴りを入れ、必殺シュートを撃ち込んだ。

『ホワイト…ハリケーンツ!!』

「…………ツ」

凄まじい威力のパワーシュートが、兵頭さんが守るゴールを襲う。

先程の太陽のフェイントは狩屋だけでなく、ゴールキーパーの兵頭さんにも僅かながら効果があつた様で、パスをそのままシュートに繋げた白竜の必殺技は兵頭さんの反応を遅らせた。

しかしそれも僅かであり、必殺技を使う暇が無くとも、兵頭さんは白竜のシュートを両手で受け止める。

……けど。

「ぐ……ぐあああああッ！」

ズドンッ！

パワーで押し切った白竜のシュートが兵頭さんの手を弾き、ゴールネットを破かんばかりに大きく突き刺さった。

『ゴオオオオル!!先制点はAチームだあッ!!雨宮のシュートかと思わせた矢先、白竜の渾身の必殺シュートが炸裂ッ!試合開始早々攻められたAチームでしたが、松風、雨宮、白竜の連携で見事に返したア!!』

「…………ツ、見事だ」

——ゴール前でそう賛辞する兵頭さんのキーパーグローブは、白竜のシュートの威力で少し焦げていた。

……よし、上手くいった!

連携技の禁止……この特殊ルールを逆手に取った、必殺技を囮にする連携。

仮にこの連携で太陽の必殺技が完全に発動していたら、それはもうシュートチェインとして扱われていただろうけど、必殺技を囮としたパスからのシュートであれば、プ

レーの連携の範囲内のはずだ。

「やったね、天馬！」

「ナイスパスだったよ、太陽！それに白竜も！相変わらず凄い威力のシュートだった！」  
「フツ、当然だ。俺はこんなところで、負けるわけにはいかないからな」

俺達は近づき、互いにハイタッチをする。

相手チームと比較しても、デイフェンス面に特化した選手が多い俺達にとって、この一点は大きい。

試合開始早々の先制点……この一点で、チームの士気も高まるはずだ。

試合の流れを引き寄せた俺達は、この勢いに乗るべく、試合再開後も果敢に攻め続けた。

——しかし暫く経ってから、データに無かったある一人の選手のプレーによって、その勢いは完全に封殺される事となった。

Inside out. 松風天馬



『……バーバリススタシヨットツ！』

『ハンターズネット…V2！』

「……ツ、ナイスだ！狩屋！」

センターラインから少し抜けた場所から、黒裂の必殺シュートが放たれる。

貴志部から渡ったパスをそのままロングシュートに繋げた黒裂だったが、流石に距離があり過ぎたのか、狩屋の必殺技でシュートブロックを掛けられ、兵頭がキツチリと抑え込んだ。

……松風天馬率いるAチームが先制点を取ってから、その勢いは更に増していた。

Bチームの神童も得意のゲームメイクで試合を立て直そうと試みるが、士気の高まったAチームのディフェンスラインを突破出来ず、天馬を中心としたオフENS陣の対応に手を焼いていた。

神童の代名詞である神のタクトであれば、このディフェンスラインを突破出来たかも

しれないが、神のタクトは必殺タクティクスに属する技術であり、この試合では禁止とされている。

『ワンダー…トラップッ!』

「ッ、しまった!」

「白竜!」

『このツーーーハンターズネット…V2!!』

ーーー更に、Bチームはデイフェンダーとして動いているのが、実質狩屋のみであった。

森村はAチームのオフエンスを止めるのには実力不足であり、黒壁は何故か試合開始のポジションから動こうともしない。

中央を守る筈の黒壁が動かない為、狩屋がデイフェンスライン全域をカバーしている状況だ。

狩屋のしなやかなボディバランス、そしてセンスと運動量から為せる技術<sup>ワッサ</sup>だが、何時迄も保つ動きでないのは確かだ。



「……ッ、黒壁！何故動かない！ちゃんと狩<sup>デイフェンス</sup>屋のフォローに入れッ！」

「……………」

デイフェンスに戻ろうと走る神童の叫びも、黒壁にはどこ吹く風といった感じだ。

……しかしその目線は、しっかりとAチームオフENS陣の動きを捉えている。

些細な動作であり、冷静さを保てていない神童は気付かなかったが、天馬を含めた少数のフィールドプレイヤーがこの事実<sup>に</sup>気付<sup>き</sup>、Aチーム側は警戒を強めていた。

「……へえ。テツシンのあの動作に気付く奴もいるんだ。……面白いなあ」

「……まあアイツも、以前に比べたらお粗末な程に動作がみえみえだからな。分かる奴には分かるんだろ」

……スタジアムの観客席、その最上段。

……そこでは二人の男が、高い位置から見下ろすかの如く、試合を観戦していた。

「………つたく、アンタの気紛れに付き合わされる身にもなってみろよ。なんだって態々

日 本<sup>こんなごろう</sup>まで来て、こんな奴らのサッカー見なきやなんねえんだよ」

「まあまあ。君もテツシンの事は心配していただろう？ 何せあれ程嫌っていた祖国の代表になろうとしているんだ。様子見程度に来るのも悪くはないだろう」

「別に心配なんかしてねえよッ！」

最上段の一角で、ある男の怒号が飛ぶ事で注目が集まる。

もう一人の男はそんな怒号もお構い無しに、薄っすらと笑みを浮かべていた。

「ほらほら、もう少し静かにしてない」と

「な……ッ、やっぱアンタと居ると調子狂うぜ全く……ッ。——それよりも、テツシンだろ？」

「ああ、そうだったね。……恐らく、彼の観察も間もなく終わる。日本の選手達がアレに対応出来るかどうか、この試合の鍵は正にそこだろうね」

そう告げる男の視線の先では、今正に、戦況が変わろうとしていた。

雪村からボールを奪った霧野から天馬へとパスが渡り、天馬は目の前に立ちはだかる神童を紅月とのワンツースで躲す。

紅月の正確無比且つ味方を走らせるパスは天馬のスピードを更に加速させ、中盤の守りを一気に突破した。

そして、現状Bチームのディフェンスの要である狩屋には雨宮がマークに付いている為、実質天馬はフリーの状態でゴール前まで駆け上がる。

「(良し……！)ここで追加点を取れば、一気に試合の主導権を取れる！……ここで決めれば……)」

スピードに乗った、天馬にとっても絶好のシチュエーション。

ゴールキーパーの兵頭が構える中、天馬はゴツドウイン드의初動に入る……その時だった。

「……ふむ、なるほど。確かに速いな」

『ゴツド……ッ!?!』

一瞬。

天馬にとって、それ程の刹那の時間だった。

技の初動に入ったと同時にいきなり目の前に現れた黒壁に一瞬怯み、身体を硬直させてしまう天馬。

黒壁はその一瞬の硬直の隙を突き、流れるような動作からボールを奪取。そのままロングフィードで一気に最前線へとパスを出した。

「ooooooooo！ 拙いッ、戻って！」

硬直から脱した天馬が、空かさず味方に指示を出す。

絶好のシュートチャンスの場合であったが故に、両チーム誰もがボールの奪取に反応が遅れ、Aチーム側はカウンターを受けた形となってしまうた。

空いたスペースに落ちたボールを確保したのはoooooooo剣城京介。

剣城もまた突然のパスに反応が遅れた一人であったが、持ち前の状況判断の速さで誰よりも早く行動し、絶好の形でパスを受け取った。

剣城はそのままドリブルで上がり、目の前の江島をヒールリフトで躲した事で、ゴールキーパーと一対一となる。

「決めさせるものかッ！」

『……デビルバーストG2ツ!!でええりやああツ!!』

黒き翼のオーラをボールに凝縮し、体の捻りを加えたパワーシュートが、ゴールを襲う。

千宮路もシュートブレイクで蹴りの連打を与える事でシュートの威力を削ろうと試みるが、最後の蹴りの一打を打ち上げる前に、ボールの勢いに押されゴールに叩き込まれてしまった。

1ー1。

「ツ、しまったー!」

「……つまさか、あそこで出てくるとはな。黒壁鉄心」

そう口にする白竜の見据える先……黒壁鉄心は既に、何事も無かったかのように元のポジションに就いていた。

剣城の得点で盛り上がるBチームだが、たった一度のプレーで状況をひっくり返した黒壁に、白竜と同様に視線を送る選手も複数いる。

ボールを奪われた天馬本人も、一瞬の出来事で何が起こったのか理解が追いつかな

かったが、黒壁に異様な何かを感じ取っていた。

「ははは！ やつぱりやるねえ、黒壁も」

「ああ、相変わらず理解不能な技術だ。——果たしてあの中の何人が、今のワンプレーに違和感を感じたんだか」

「そうだね……君も気付くのに二週間は掛かったからね」

ほっとけ——と、男は不貞腐れるように言葉を返す。

もう一人の男は、そんな男を一瞥しながらも、その赤い瞳をフィールドで戦っている選手達に向け——。

「……さあ、見せてあげなよ。君が絶望した、祖国のサッカープレイヤー達に。君の本領——」

そしてその表情は、相変わらず笑みを浮かべていた。

「ローポイズン・フィールドコマンドをさ」